ナイトウィザード・リプレイ
～狼と少女～

NIGHT WIZARD！　ーREPLAYー

夢は「現実」。
世界は「虚像」。

紅き月が天高く揺らめく夜、
月門を通って闇の眷属は人の世界へと侵入する。

人知れず、静かに壊れゆく世界。
世界に具現化する悪夢。

あまりに脆く、移ろいやすいこの世界の上で、
人が遠き過去に忘れ去った力…魔法を、
駆使して戦う者達がいる。

それは、唯一闇に対峙しうる力。
現代に蘇った魔術師。

ナイトウィザード
夜闇の魔法使い

―ナイトウィザード・ルールブック、カラーページより

◆　状況開始　～キャラクター紹介～　◆

■ＰＣ１：常盤弘助

ＧＭ：というわけで、キャラクター紹介始めましょうか。まずはPC1から。
ＰＬ１（以下、弘助）：はい。常盤弘助といいます。二つ名は"森の申し子"です。
　クラスは人狼/魔物使い。人狼１Ｌｖ、魔物使い２Ｌｖ。
　大自然の加護を受けた人狼の一族が日本のどこかにいまして、そこの人狼達は自分達に害が無ければ我関せずといった感じなんです、エミュレイターに対して。で、「それ、おかしくね？」と言って飛び出してきた少年です。そんなわけで、クラスに魔物使いが入ってますが、使うのは魔物じゃなくて自然の力を使います。
　ライフパスは"一族の継嗣"と"猫に嫌われる"です。
ＧＭ：いいの取ったなぁ（笑）了解しました。
ＰＬ３：年齢くらい聞きたいぞー。
弘助：おっとそうだ。年齢は17歳です。…狼にしては歳くってるんじゃ？
ＧＭ：人狼だから大丈夫（笑）
弘助：ワークスは高校生。学費はどうしてるかっていると、“ブラウニー（精霊）”がお金を持ってきてくれるんだ。
ＧＭ：このニート野郎め（笑）
ＰＬ３：君のためにブラウニーは自販機の下を…（笑）
ＰＬ２：（いきなりブラウニーになって）「これしか…これしかねぇっ！！！」（笑）
ＧＭ：ぶ、ブラウニー可哀相すぎるっ！！（笑）あ…というわけで、他に言うこと無かったらクリティカル値とファンブル値を決めてください。
弘助：はーい。（サイコロを振る）…クリティカル値は１１。（再びサイコロを振る）ファンブル値は９だぁ。
ＧＭ：ひどい値だな（笑）一応、ＣＦ修正で値を上下させることはできるからね。
弘助：うーん…
ＰＬ３：ＣＦ修正いくつー？…あ、２しかないのか。ずらしにくくない、この値？
ＧＭ：んだねぇ。
弘助：んー、クリティカルを１０、ファンブルを９に。怖いなぁ（笑）
ＧＭ：早速、暗雲が立ち込めてきたな（笑）

―常盤　弘助―

性別	：男
年齢	：１７歳
出身	：日本
第一属性	：地
第二属性	：風
クラス	：人狼１Ｌｖ 魔物使い２Ｌｖ
ワークス	：高校生
ライフパス	：一族の継嗣 猫に嫌われる
ふたつ名	：森の申し子

■ＰＣ２：アラン･クルーガー

ＰＬ２（以下、アラン）：名前はアラン・クルーガー、イギリス産まれの２９歳です。
　二つ名はは“３代目神狩り”。イギリスには邪神が降臨したりとかするので、そういった化け物の類が出現する前に倒す一族でして。
　そんなわけで、３代目神狩りとして先代から銃を受け継ぎ、技を受け継ぎ、今はウィザードとして戦っています。
　そんな、もうすぐ三十路なイギリス人です。
弘助：もうすぐ三十路って、いいよな（笑）
ＧＭ：イギリス人って歳くってるとカッコいいイメージあるよな（笑）
ＰＬ３：いいよな（笑）

ウィザード：その名のとおり魔法使い。科学という名の常識に支配された世界で、非常識な力である魔法が使える人間のこと。古典的な魔術師のような者もいれば、普通の見える者や、最新兵器に身を包んだ者もいる。ちなみに、魔法が使えない人間は“イノセント”と呼ばれて区別される。
エミュレイター：“侵魔”とも呼ばれる。異世界から来る正体不明の敵である。その目的は、何らかの方法でこの世界を書き換えること。非常識な存在のため、常識…すなわち科学の力は一切通用しない。非常識な敵に対抗できるのは、同じく非常識の力が使えるウィザードだけなのだ。

人狼：いわゆる、狼人間。
　　非常識な存在である彼らもまた、この世界を守る魔法使いなのだ。
魔物使い：“魔物”を使役して戦うクラス。魔物の形状は、人それぞれである。
ＣＦ修正：クリティカル、ファンブル修正。このゲームには、クリティカル値とファンブル値というものがあり、その数字と同じ出目が出るとクリティカル／ファンブルが発生する。ＣＦ修正は、それを調整するための値である。
魔剣使い：“魔剣”と呼ばれる自分専用の武器を使って戦うクラス。アランのように剣じゃない“魔剣”を持っている者もいる。

アラン：まあ、そんな感じの半分オッサン入ってるキャラだと思ってください。
　クラスは、魔剣使い/忍者/強化人間。全部１Ｌｖずつです。ワークスはハンター。
ＧＭ：了解。それじゃあ、クリティカル値とファンブル値を決めてください。
アラン：（サイコロを振る）クリティカル値は７。
　（再びサイコロを振る）ファンブル値は８…ＣＦ修正で１１にします。

ーアラン・クルーガーー

性別	：男
年齢	：２９歳
出身	：英国
第一属性	：虚
第二属性	：風
クラス	：魔剣使い１Ｌｖ 忍者１Ｌｖ 強化人間１Ｌｖ
ワークス	：ハンター
ライフパス	：秘伝の継承者 仲間に苦手な人がいる
ふたつ名	：３代目神狩り

■ＰＣ３：ジュリア・クラーク

ＰＬ３（以下、ジュリア）：キャラクター名、ジュリア・クラーク。二つ名は“ラブノス・ヴァンピーレ”。出身は、アランと同じくイギリス。性別は女性、年齢は１６歳に"見えます"…というよりは、１６歳で止まってます。
　クラスは吸血鬼/聖職者。２Lvと１Lv。

ＧＭ：かなりキナ臭いクラスが出てきたぞ（笑）
ジュリア：ライフパスは、"裕福な家"と"病に倒れる"。まあ、病ってのは、吸血鬼病ですが（笑）ワークスは、神の僕です。
弘助：で、その神ってのは何相当だっけ？（笑）
ＧＭ：相当も何も、こいつモロに『ＢＡＢＥＬ』で取ってるし（笑）
ジュリア：真面目な設定を言いますと、昔は裕福な家に生まれたんですが、そこを放浪の吸血鬼に襲われまして、一族全員グールに変えられてしまいました。私だけは助かったんですが、吸血鬼となってしまったんです。それから数十年の時を吸血鬼として過ごしていたんですが、そこで私は神の声を聞いた。神の声を聞いて、私は変わりました。そう、神の僕に！！（笑）
アラン：あ、あぶねぇ…（笑）
ＧＭ：わかりました。それじゃあ、クリティカル値とファンブル値を決めてください。
ジュリア：（サイコロを振る）クリティカル値は７。普通だね。もしかして、ＰＣ１以外は普通なんじゃないだろうか（笑）
　（再びサイコロを振る）ファンブル値は、４。

ージュリア・クラークー

性別	：女
年齢	：１６歳（外見年齢）
出身	：英国
第一属性	：火
第二属性	：天
クラス	：吸血鬼１Ｌｖ 聖職者２Ｌｖ
ワークス	：神の僕
ライフパス	：裕福な家 病に倒れる
ふたつ名	：ラヴノス・ヴァンピーレ

強化人間：エミュレイターと戦うために、自身の身体を強化している者。
　　前衛、後衛どちらでもいけるが、能力的には射撃戦闘に長けている。
忍者：古来から存在する、日本においては伝統的なクラス。ニンニン。
吸血鬼：ヴァンパイア。ウィザードとしての吸血鬼は太陽光に対する耐性と吸血衝動の抑制能力を持っている。
聖職者：何らかの宗教を信仰し、信ずる者のために力を振るう者達。信仰対象の力を借りて戦う。

◆　運命の扉　～オープニングシーン～　◆

■邂逅　Opening 01

　少年は今まで人知れず、敵―エミュレイター―から世界を守ってきた。
　狩った敵は既に数知れず。今宵もまた、少年は世界の敵を己の牙と爪で砕き、引き裂いてきた。
　しかし、少年はまだこれから動き出す運命に、まだ気付いていない―

ＧＭ：それじゃあ、最初のオープニングシーン。弘助のシーンから行きたいと思います。
弘助：はい
ＧＭ：確か、高校生だったね…じゃあ、今はバリバリ夏休みの最中ってことにしておこう（笑）
弘助：よっしゃ（笑）
ＧＭ：そんで、君はこの夏休みの間何をしているんだ？
弘助：エミュレイター狩りです（即答）
ＧＭ：了解。それじゃあ、時間は夜。君は、この街に巣食っていたエミュレイター―といっても小物だったけど―を狩った、その帰り道を歩いていた。…ということにしておこう。君は人気の無い道をただ一人、歩いている。
弘助：「…少しは、しぶとかったな」と言って、拳を握ったり開いたりしています。
ＧＭ：なるほど。そうやって歩いていると、君の目の前を―ちなみに、ここは十字路なんですが―１人の少女が目の前を走って通りすぎようとしていた。その少女は、時折何かに怯えるように後ろを振り返ったりするんですが、そのせいで少女は足が縺れ、転んでしまう。
弘助：おっと、転ぶ前に抱きとめるとかは？
ＧＭ：距離的にちょっと無理かもしれない。
弘助：了解。じゃあ、転んだところで「おい、大丈夫か？」と言いながら駆け寄る。
ＧＭ：はい。少女は、寝巻き同然の格好をしていて、その服も所々が切れています。何かに切られたような感じですね。
弘助：「ん…どうか、したのか？」
ＧＭ：なるほど。ついでに言っておくと、靴は履いていない…そのせいで、足の裏に血が滲んでいるといった状態だ。
　「つぅ…」と少女が呻きながら起き上がろうとすると、声をかけてきた君に気付いて、バッと離れる。
弘助：「？…な、別にあんたをどうこうしようってワケじゃない。あんた、そんなにボロボロで…どうしたんだ？」
ＧＭ：ん…確かに彼女は怯えている。
　が、それは君に向けられたものじゃなく、別の何かに向けられたものだと君は感じた。そして、少女が「ダメ…私と、一緒にいると…！」と言いかけたところで、道を塞ぐように黒塗りの車が急ブレーキをかけて停車する。
　で、その車から"アサルトライフル"を構えた十数人の男が降り、君達を取り囲みます！！
　かなり組織地味た感じです。手馴れてますね。
弘助：「おいおい…なんだよこりゃあ。どういうつもりだ、あんたら！」
ＧＭ：彼らは君の問いには答えず、「ターゲットを包囲した…イレギュラーが存在するが問題ない、オーヴァー」
弘助：「ターゲット…？」
　その言葉に反応して、眉をひそめながら少女を見ます。
ＧＭ：少女は確かに怯えている。それは兵士に対してのものもあるだろうが、多くは別の何かに向けられている…気がする。
弘助：ＯＫ。その怯えた少女を見て、俺は決心を固める。「ち…」と舌打ちをする…が、逃げられるような状況じゃないな。
ＧＭ：うん、バッチリ（笑）
　そんなピリピリした空気の中、兵士達の後ろからリーダー格らしき男が君達の前に現れる。そして、「彼女を渡してもらおう、イレギュラーの少年」と。

　黒き輝きを放つサングラスに、少年と少女の像が写りこむ。男はただ、その姿を無表情に見つめていた。
　一触即発の空気が、冷たいアスファルトの上を流れていく―

■陰謀　Opening 02

　世の中、というのは実に暗い部分が多い。
　ウィザードとしての仕事もそうだが、時には人類に背くような真似をしなくては、神狩りといえども食ってはいけないご時世になった。
　だがそれでも…仁義と人情だけは忘れてはならない、というのが彼のポリシーだ。

ＧＭ：次のオープニングシーンに移りたいと思います。アラン・クルーガーのシーンです。
アラン：あい。
ＧＭ：あなたは、一条灯夜という人物から依頼を請けた…ということになっている。
アラン：（灯夜って）オッサン？爺さん？
ＧＭ：おにいさんです（笑）
アラン：ふむ。
ＧＭ：この一条家というのは、ウィザードの間でも色々と疑わしい所がある、怪しげな一族です。そんな一族から、あなたは依頼を請けました。
　それは兎も角として…ここは、某所のとある一室と

アサルトライフル：軍人さん御用達の自動小銃。
　　雑魚キャラが持つとろくな目にあわない兵器の一つ。
エミュレイター狩りです：この暇人が。
一条家：基本ルールブック参照。表向きは巨大財閥を抱える名家だが、エミュレイターとの繋がりがあると疑われている。

いうことにしておきましょう。あなたは、そこで一条灯夜と向かい合っている。
アラン：なるほど。「煙草…いいかな？」
灯夜（GM）：「私は煙草が嫌いでして…すいませんがお控えいただけるでしょうか？」
アラン：「ち、しょうがねぇな。まぁ、いいけどよ…で、わざわざイギリスから俺を呼んで、何の用だ？」
GM：「少々、私達の手に負えない事が起きてしまいましてね」
　といって、パチッと指を鳴らすと、一人の男がスッと側に現れる。黒髪、黒いスーツ、黒いサングラスと全身黒ずくめの男だ。
　君は知っていていいことにしよう…"鴉"と呼ばれる、灯夜の直属の部下です。
　彼が、君にスッと資料を渡す。
アラン：了解。「…これは？」
灯夜（GM）：「依頼内容は至って簡単です。檻から逃げ出した小鳥を捕まえてくれれば、いいんです」
アラン：では、こういうふうにですね（と言って、紙で顔の下半分を隠す）、顔を覗かせ…「小鳥…ねぇ。小鳥じゃあ、ねぇんだろう？化け物か？」
灯夜（GM）：「化け物の類とは、ちょっと違うものです。まぁ、詳しく話すことはできないのですが」
アラン：資料に、その"小鳥"の画像とかはある？
GM：ありますね。
アラン：どんな感じ？
GM：外見は少女に見える。
アラン：そうか。「まだ、乳臭せぇガキじゃねぇか」（笑）
灯夜（GM）：「ええ、そうです…その子を捕まえるだけで、あなたは報酬を貰える。なんとも、破格な仕事じゃありませんか？」
アラン：「確かに破格だな…どうして、こんなに高い金をくれるんだい？簡単な仕事なら、こんな金払う必要もねぇだろう。そして、どうして俺を呼んだんだ？」
灯夜（GM）：「あなたが歴戦のウィザードであること…そして、その額はあなたの腕に見合ったものだと思ってください」
アラン：「そうだろうそうだろう…つまり、こいつはタダもんじゃあねぇ」
灯夜（GM）：「ふ、ご明察です。まあ、無理なら殺してしまってもかまいませんが…」
アラン：「いや、捕まえる。それくらいの力量は出さなくてはな」
GM：それに対して、彼はクスッと笑い、「頼もしい、限りです」
　続けて、「それと、私は事を穏便に運ぶ主義でして…なるべくなら、他の組織に悟られぬよう、お願いしたいものです」
アラン：「わかったよ…依頼内容は、以上か？」
灯夜（GM）：「ええ、以上です。それではよろしく頼みますよ、ミスター・クルーガー」
アラン：「ああ…さてと、俺はもう出るぜ。さっきから、煙草を吸いたくて仕方ねぇ」
GM：「ええ。鴉、お見送りを」と灯夜が言って、鴉が外まで見送ってくれる。
アラン：「ああ、鴉…ここでいい。ジャパンは俺も日が長いんでな」
GM：「そうですか。では、これで」と言って、鴉は去っていきます。
アラン：「やれやれ、キナ臭い仕事に関わっちまったもんだ」と言って、煙草に火をつける。
GM：了解。じゃあここでシーンを切ろうか。

　不味い紙巻の味に少々顔をしかめながら、アランは空を仰ぐ。空には、びっしりと敷き詰められた雲。天気予報は晴れと言っていたが、一雨が来そうな雰囲気。まるで、これからはじまることを暗示しているかのように…
　肺に煙を思いっきり吸い、そして吐く。
　曇り空に、紫煙が混じっていった。

■夜の住人　Opening 03

　永き時を生きてきた彼女は、今まで多くの者との出会いと別れを経験してきた。
　彼女にとって、それらは全て神の意志によって導かれたもの。全てが等しく尊い縁。
　長くに渡って続く、この一族との縁もまた…彼女にとっては、神の意志によって結ばれた、尊い縁の一つ。

GM：次のシーン、ジュリア・クラークさん。
ジュリア：はい。
GM：春日家とあなたは、（何故か）浅からぬ縁があります。そんなあなたは、春日家からの依頼を引き受けることが多々あります。
　ついでに解説しておくと、春日家にとって他の力を借りることは大変不本意らしいです（笑）ですが人材不足により、背に腹は変えられないという状況でもあります。
　で、例によって今回もあなたは依頼を請けたというわけです。
ジュリア：はい。
GM：というわけで、今あなたは春日家の屋敷…といっても、ここは緋山市にある別宅です。本家は阿蘇にあるんで。
　で、呼び出されたわけです。
ジュリア：うんうん
GM：屋敷の玄関に入ると「お待ちしておりました」と、依頼主である当主―春日吹雪―の専属の給仕、奏沙耶が出迎えてくれます。
ジュリア：「ええ、荷物を頼めるかしら？」と言って、でかい旅行鞄を渡します。
GM：「畏まりました」と言って、彼女はその重そうな旅行鞄を持って「こちらの鞄は、客室のほうに運んでもよろしいのですか？」
ジュリア：「ええ、お願い」
GM：「畏まりました」と言って、彼女は客室のほうへと行きますね。

春日家：本リプレイオリジナルコネクション。異端を狩るために自らを異端に貶めている一族。故に他の派閥とは一切協力関係を持たず、現在は小規模な一派閥程度でしかない。
でかい旅行鞄：何が入ってるのやら。
春日吹雪：春日家の若き当主。１７歳。ウィザードとしての実力は非常に高い。
　　だが、このシーンに出ている彼は…？
奏沙耶：メイドさん。名前はあるけど、シナリオには無関係。

ジュリア：見知ったところのように、まっすぐに執務室にまで行きます。
　コンコン、とノックして「失礼するわ」
ＧＭ：ん。執務室に入るとですね…
　そこにいるには不相応な、しかし、そこにいるのがさも当然のようにしている一人の人物…特徴的な、銀髪、宝石のような紅い瞳。
ジュリア：「久しぶり、それとも、もう代は変わってしまったのかしら？」
ＧＭ：ほう（笑）
　そう、そこにいる人物。若干１７歳で春日家の当主となった、春日吹雪。
　「ああ、お待ちしていました、ジュリアさん」
ジュリア：「その口調からすると、まだ変わってはいないようね」ただの皮肉と取ってもらっても構わない（笑）
ＧＭ：了解した（笑）「あなたがここに呼ばれた理由…まあ、例の如く、依頼といったところでしょうか」
ジュリア：「ええ、そう聞いているわ」
吹雪（ＧＭ）：「最近、一条に何やら不穏な動きがあると諜報の人間から聞きまして」
ジュリア：「一条」と噛み締めるように言った後…「神の声を聞かぬ者達のことですか」（笑）
吹雪（ＧＭ）：「ええ、そうです。私達としては、彼らに色々と水面下で動かれては、少々不愉快です」
ジュリア：「ええ」
吹雪（ＧＭ）：「なので、あなたには一条が何をしているのか、それを探ってもらいたいんです」
ジュリア：「なるほど、ですが…彼らが神の声に背くような行為をしていた場合、探るだけでは済みませんよ？」
ＧＭ：「ええ、もちろん」と言って、吹雪は親指で首筋を掻っ切るような仕草をしながら、「やってもらっても、構いません」と、すごいニコニコしながら言います（笑）
ジュリア：それに対して、私もニコリと笑顔で答えるように「ええ、あなたならそう言ってくれると思いました」（笑）
吹雪（ＧＭ）：「ええ、話がわかっていただけて、とても助かります…それでは、よろしく頼みます」
ジュリア：「ええ、任せてください。神の僕として、あの者達には正しき、裁きを」
ＧＭ：それじゃあ、このシーンはここでカットしておこう。

　彼女の敵は、神の意志に背く者達。
　春日家の敵は、自らに都合のよくない者達。
　今の彼女と彼らを繋いでいる縁は、両者の間に狩るべき共通の敵が存在するからだ。
　一歩間違えば、敵同士になりかねない関係。
　しかし、そんな危うい縁が、こうも長く続いているということは…それこそ、彼女の言う“神の意志”によって成り立っているからかもしれない。

水面下で動かれては～：彼らも、色々と後ろめたいことがある一族なのです。
やってもらっても、構いません：一条家と春日家の関係を表す一言。要はそういう関係である。

■予兆　Opening 04

　電車から降りると、天気はあいにくの雨。晴れるといっていた天気予報士をちょっとだけ恨む。

　多くの人でごった返している駅前、傘をさしている分、密度が普段よりも高い。
　ここにいる多くは、おそらくは、仕事を終えて帰宅する人間達だろう。

　人ごみを見て、はぁ…とため息をつく。
　こんなことなら、わざわざ電車を使って一人で帰るんじゃなかったと、後悔する。

　人ごみは好きではない。というより、騒がしいのが好きではない。故に、今回の阿蘇の本家からの呼び出しは、正直気が進まなかった。
　あそこは、騒がしいのが多すぎる。

「乾物ジジイどもめ、些細なことでいちいち呼び出すなというのだ」

　小言だけは一人前のあいつらの顔を思い出して、つい苛立ちが言葉に出てしまう。
　それを耳にしてしまったのか、アルバイトがキョトンとした顔でこっちを見ている。
　…悪い癖だ、人付き合いに慣れてないせいか、思ったことをつい口に出してしまう。
　少々気まずくなったので、ビニール傘の代金をさっさと払って、コンビニを出た。

　ついさっき買った傘をさし、足を一歩踏み出す。あとは帰路につくだけだ。

　…ふと、その気配に気がつく。
　誰よりも、"その手の存在"の気配に敏感な、己の体に流れる血が、神経が、全ての細胞が、それを察知する。

「…妙だな」

　天を見やる。
　天気はあいにくの雨、太陽は地を照らさず、ただ空には雨雲がびっしりと敷き詰められている。
　しかし、そこにそれ以外の何かがあるかのように、ただ一点をその紅い眼は見ていた。

「少々、寄り道する必要がありそうか」

　―帰路につくのは、もう少し後になりそうだ。

■脱出　Opening 05

　周りは、アサルトライフルを構えた兵士達。
　その中央にいる、自分と少女。
　突破口は無きに等しい。あるとすれば空か…と思ったが、自分は空を飛べるなんていう便利な能力は持っていない。
　状況は、絶体絶命―

ＧＭ：まだオープニングは続くよー。弘助君。
弘助：はい。
ＧＭ：先ほどのシーンの続きです。
　リーダー格らしき男が「彼女を渡してもらおう、イレギュラーの少年」と言います。
　ちなみに体格の良い黒人男性だ。…特に意味は無いが（笑）
弘助：「…この子がどうしたんだ、この子が何か悪いことでもしたっていうのか」
リーダーらしき男：「君に話すようなことは、何も無い」
弘助：「話せるようなことじゃないってことか」
ＧＭ：それに対しては、無言で返してくる。
弘助：「だったら、お断りだ」と言って少女を庇うように立ち塞がる。
ＧＭ：それを聞くと「武力に頼るようなことは、なるべくしたくなかったのだがね」と言って、スッとその男が手を挙げ、周囲の兵士達に合図をしようとした瞬間！
　カンッという音と共に何かが投げ込まれ、周囲を煙が包みこむ。催涙弾だ。「状況…ガスッ！！」「ターゲットを見失うな！」と言って、兵士達が慌てふためく。
弘助：「今だ、掴まれっ！」といって、少女を抱えてダッとそこから離脱します。そして、ビルの間を飛び越えながら駆け抜ける。
ＧＭ：了解しました。そうすると、とあるビルの屋上で止まった君の目の前に、全身黒ずくめの男が立っている…「どうやら、無事だったようですね」
弘助：「あんた、誰だ？」
黒ずくめの男（ＧＭ）：「名乗るような名前は、ありません」
弘助：「じゃあなんだ…少なくとも、あいつらの仲間じゃなさそうだけど」
黒ずくめの男（ＧＭ）：「ええ、それだけは確約しましょう」
弘助：「じゃあ、あんたはなんなんだ」
黒ずくめの男（ＧＭ）：「……少なくとも彼女が彼らの手に渡ることを望まぬ者です。私にそういう感情があればの話ですが」
弘助：「そっか、じゃあ…まあいいけど」と、まだちょっと胡散臭い感じに見ています。
ＧＭ：それに対して、サングラス越しに視線が向けられる。「ここから先は、あなたのほうが適任かもしれません」
弘助：「適任？」
黒ずくめの男（ＧＭ）：「彼女のことを、お願いできませんか？」
弘助：「ん、この子を？…あぁ、それならいいぜ。というより、俺には無理だって言われてでも、やってやる」
ＧＭ：「そうですか。それでは、よろしくお願いします。…これ以上の長居は、上の者に怪しまれます。それでは」と言って、その男は立ち去っていく。
弘助：「多分、さっきのもあの人のだよな…」と、ボソリと呟く。
　で、「大丈夫？」と少女のほうに。
ＧＭ：その言葉に対し、彼女はコクリと頷く。
弘助：「ちょっと待ってろ」と言い、自分のシャツを豪快に破いて、足に巻いてやる。
ＧＭ：それに対しては、「…ありがとう」と。
弘助：「ん？いいって。男が女の子を守るのは当然だろ？」

　彼は、おそらく信頼に足る人。
　だから、あの人は彼に自分を託した。
　でもそれは、彼もまた…今まで自分と一緒にいた人達と同じような目にあうことを意味している。
　それだけは、できない。
　もう、目の前で誰かが傷付くのは、嫌。

「でも、私と一緒にいると…あなたが不幸になる」

特に意味は無い：所詮、雑魚の大将でしかない。
黒ずくめの男：一応、ここでは正体不明ということで。

◆　噛み合う歯車　～リサーチシーン～　◆

■接触　Research 01

　地方都市、緋山。地方にしては珍しく、非常に賑わった繁華街を持つこの街は、夜になっても賑わいが耐えることが無い。
　酔っ払いや不良が行き交う道の中、１人の異国人の男…アラン・クルーガーの姿があった。

ＧＭ：最初のリサーチ、アランをメインにします。
　ジュリアさんは登場可能としておきます。好きなときに出てください。
アラン：了解。
ＧＭ：あなたは、ターゲットの少女が緋山市に逃げこんだ可能性があるという情報―資料に書いてあったことにしましょう―を頼りに、緋山市に来ました。
　今は深夜、あなたは雑踏の中を歩いている。天気はあいにくの雨だ。
アラン：…時間軸的には、どうなってる？
ＧＭ：（今までのシーンは）同じ日に起こってるものとしてください。
アラン：了解。
ＧＭ：この緋山市、地方都市とはいえ、繁華街は深夜にも関わらず多くの人で賑わっている。これらの影で、何かの陰謀が蠢いているとは思えないほどの華々しさを出しています。
アラン：「賑やかな、街だな」と言いつつ、歩いていきます。傘もささずに。
GM：なるほど。そうやって歩いていると、あなたの横をスッと気になる人影が通り過ぎる。
　長い銀髪、宝石のような赤い瞳。男性か女性かはわかりませんが、それはあまり重要ではない。ちなみにビニール傘さしてる。
アラン：ほう。
ＧＭ：すれ違った瞬間…そうですね、例えるなら抜き身の刀のような、触れればそれだけで斬られるような、そんな殺気を感じる。
アラン：じゃあ、その人とちょっと肩がぶつかることにしてくれ（笑）
ＧＭ：了解（笑）ぶつかるといっても、触れたというか、掠った程度。ぶつかるという概念には程遠い接触ということにしておきましょう。
アラン：「おっと…すいません」と言いつつ、振り返りましょうか。
ＧＭ：その人物はチラリとあなたのほうを見たあと、何事もなかったかのように歩き出していく。
アラン：「何だ、あいつは」と言いつつ、そいつを見ますよ。
ＧＭ：ん。その人は傘をさしつつ、雑踏の中に紛れ込んでいきます。
アラン：なるほど。「にしても、さっきの殺気は…尋常じゃなかった…ちょっと追いかけてみるか」
　だが、既に遠く離れ、雑踏に紛れてしまったらしい、その人物を見つけることは出来なかった。
　あれだけの特徴的な外見、そして異常なまでの殺気を放っているにも関わらず、だ。
　「ち、見失ったか」
　そうぼやいた時、不意に袖が引っ張られる。
　視線を向けた先には、見知った顔―端正な顔立ちの異国人の少女がいた。
　「どうしたのですか、“３代目”。そのように、周りを見渡して」

アラン：「“ヴァンピーレ”、どうしてこんなところに？」
ジュリア：「それは、こちらのセリフです。貴方達の一族は、大英帝国（向こう）にいるはずでは？」
アラン：「何かと、金も入用でな。“働かざるもの食うべからず”とは、ジャパンのコトワザだったか」
ジュリア：「私はあまり、日本には精通していませんが…何となくわかります」
アラン：「オリエンタルは面白いぜ」
ジュリア：「それは同意できます。そも私達の一族は…」と言って、語りに入ろうとします（笑）
アラン：「おっとストップ。すまねぇな、あんたの喋りはエンジンがかかるといつまでも止まらない」
ジュリア：「残念です。いつか私の一族、そして血脈、そして重要な神の言葉について語りたいのですが」（笑）
アラン：「それは、既に１００回も聞かせてもらったぜ」
弘助：特に毒電波のあたり（笑）
ジュリア：「残念です。まだ１００回でしたか」
アラン：「ジュリア…一体、何故こんなところにいるんだ？」
ジュリア：「貴方の言葉を借りれば、“働かざるもの食うべからず”でしたっけ？」
アラン：「なるほど、そっちもお仕事だったか」
ジュリア：「まあ…神に仇為す者を叩くための、良策でもあるのですが」と、両手を胸の前で組む。
アラン：「不死者にも神は微笑んでくれるのかな？」
ジュリア：「神は、神の声を聞く者を、等しく愛します」
アラン：それに対しては、頭をポリポリと掻いてですね…「やれやれ、いつもこいつはこれだ…」と言いつつ、「そうだな、お仕事で来たってんなら話は早い。エミュレイター関係の仕事ってことだろ、それは？」
ジュリア：一条家ってエミュレイターに含まれるんでしょうか？（笑）
ＧＭ：違うけど、そうです（笑）
ジュリア：「近いですが、惜しいですね。神に仇為す者、という意味では同じですが」
アラン：「ふむ、そうか…確かに俺もキナ臭い奴は色々知ってるけどよ、この間も会ってきたところだ…

時間的には：シーン制のＴＲＰＧにおいて時間軸はそこまで気にする必要はないが、念のため。
大英帝国：英国ほど魔術師が多い国は無い。それを評して敢えて表記を大英帝国とした…ということにしておく。
違うけど、そうです：一条家は関与はしているが、エミュレイターそのものではない、という意味。

あんたが追っているのは一条家。違うか？」
ジュリア：それには少し驚いたような顔をしてですね、「何故わかったのです？」
アラン：「いや、勘だよ。キナ臭いてのは、さっき奴らの臭いを嗅いできたからさ」
ジュリア：「まさか…神の敵に与するつもりではありませんよね？」
アラン：「奴らが、その神とやらの敵なのかどうかは、俺にはわからねぇ。俺はただ、言われた仕事をこなすだけ…のはずなんだが、奴らがエミュレイターに与するとあれば、この３代目…そんなことには手を出すつもりぁ、ないなぁ」
ＧＭ：なんか、今江戸っ子臭かった（笑）
ジュリア：なんか混ざった（笑）
弘助：特に３代目～あたりから（笑）
ＧＭ：リプレイじゃ表現しきれないぞ（笑）
ジュリア：んーと…「強大な者に立ち向かうには、手を組むのは必定。おそらく、その者達は手を組んでいるでしょう」
アラン：「あーあ、そうかいそうかい。しっかし、疑心暗鬼もほどほどにしないと、肩が凝って仕方が無いんだぜ？」
ジュリア：「私はただ、信じているだけです」
アラン：「なるほどね、疑心は信じているからこそってことか。それじゃあ俺はあんたを信じよう」
ジュリア：何？（笑）
アラン：「奴らからは、隠せとは言われてないからな。…この嬢ちゃんは知らねぇか？」
ジュリア：知らないよね？
ＧＭ：うん、君は知らない。
ジュリア：ちなみに、その子は何歳くらいですか？
ＧＭ：あなたの見た目年齢と同じくらいだと思う。
ジュリア：じゃあそうですね、「可愛らしいお嬢さんですね。…残念ながら見覚えはありません」
アラン：「そうか…一条家はこいつを捕まえてこいと言いやがった。こいつを“小鳥”と称してな」
ジュリア：「鳥は鳥篭に、ですか」
アラン：「ああ、そうだが…どうにも俺は気が進まねぇ。乳臭いガキであっても、レディはレディ。どうにも、こいつを捕まえる気にはならねぇのよ」
ジュリア：「貴方が、私を信じて下さるのであれば、私も貴方に言いましょう。私の今回の仕事は…神の敵、一条家の陰謀を阻止することです」
アラン：「ふむ、そうかい」
ジュリア：あれ、調べろって言われた気が？…まあいいか（笑）
ＧＭ：ほら、やっちゃっていいって（春日吹雪が）言ってたし（笑）
ジュリア：いいよね（笑）
アラン：では、そう言われるとですね、ヒュウッっと口笛を吹いて…「そいつは、話は早い。俺もあの一条家とやらには、何か陰謀といったキナ臭いものを嗅ぎ続けてきたんだ。臭くってありゃしねぇ。まぁ、いずれにしても…鍵はこの娘にありってことだろうな」
ジュリア：「そのようですね。それが、彼の者達の狙いならば、その少女…一刻も早く見つけなければ」
アラン：「あぁ…しっかし、手がかりも何も無ぇ状態で、一体どうやって探すんだ」
ジュリア：それには、笑顔で答えます。「全ては、神の導きのもとに」
アラン：それには、ニヤリとする（笑）
ＧＭ：それじゃあここでシーンカットしておこう。

■白いカラス　Research 02

ＧＭ：ところで、続けてジュリアのシーンになるわけだが（笑）
ジュリア：マジですか。登場しちゃったじゃん（笑）
アラン：時系列的に、登場したほうがいいのか？
ＧＭ：いや、時系列的には（さっきのシーンから）割と後なんで。
アラン：じゃあ、そこでわかれたことにしておこう。
ＧＭ：ん、特に問題ありません。弘助はいても構いませんが、出るかどうかは状況次第で。
弘助：了解。
ＧＭ：あなたはさっき、アランと別れた後、あなたもまた雑踏の中を歩いている。
ジュリア：さっきは演出を忘れましたが、可愛らしい傘をさしていると思われます（笑）
ＧＭ：了解（笑）あなたがそうやって歩いていると、横のガードレールに１羽のカラス…（アランのプレイヤーを見て）さっきの“鴉”じゃないからな。
ジュリア：普通のカラスだよね（笑）
ＧＭ：ん、“鴉”じゃなくてカラスだ（笑）真っ白なカラスが、ガードレールに止まる。そして、クァァッとあなたの方を向いて鳴く。
ジュリア：ほう、なるほど。では、その白いカラスに向き直ってですね、「何用ですか？神の声を聞きたいというのであれば、一時間かけて語ってさしあげますが」
ＧＭ：あなたの言葉には意を介さず、カラスは悠著に毛繕いをしている。で、あなたは気付くわけですが、そのカラスの足にですね、何か紙みたいのが括り付けられている。
ジュリア：「神の声どころか、人の言葉すら聞かないとは」と言いながらですね、カラスの方に近づいていきたいと思います。
ＧＭ：了解しました。
ジュリア：特に逃げませんよね、そのカラス。
ＧＭ：逃げませんね。さっきも言ったけど、悠著に毛繕いしてる。…逆に取り辛い気がしてきた（笑）
ジュリア：そうかも（笑）カラスにですね、「その紙は一体どうしたのですか？」と一応聞いてみる。
ＧＭ：やはり、聞く耳は持っていない。相変わらず毛繕い。
ジュリア：「動かないようならば…」と言って、そのカラスの足に付いてる紙に手を伸ばそうとします。
ＧＭ：特に妨害するような意思はないみたいだ。

江戸っ子：プレイ中、ここがかなり面白かったのでカットせず載せた。音声媒体が無いのが悔やまれる。
見た目年齢：本当の年齢は…ゲフゲフ。
やっちゃっていいって言ってたし：よく考えると、かなり過激かつアバウトな発言である。
逆に取り辛い気が～：下手すると突かれる。

“鴉”じゃなくてカラス：文字媒体にするとわかりやすいが、音声媒体のみだと誤解を招く。みんなは紛らわしい名前を使うのはよそう。

ジュリア：妨害が特に無いなら、取りたいと思います。
ＧＭ：了解。あなたがそれを取った瞬間、バサッと翼を広げてカラスは飛び立っていく。
ジュリア：「あの者は、神とは別の声を聞いているようですね」と、ボソリと言った後、その紙を見てみようと思います。
ＧＭ：紙に書かれている内容は、いたってシンプルな内容だった。そこには、"大いなる者（グレートワン）"を始末しろ…と、ただそれだけが書いてあります。
ジュリア：その紙を見るとですね、ギリッと（紙を）握ってですね、「神の僕に、彼の者の僕を討てというのですか」（笑）
ＧＭ：（笑）
ジュリア：ボソッと呟き、その紙をですね、近くのゴミ箱に投げつけたいと思います（笑）
ＧＭ：わかりました（笑）
ジュリア：ものすごい勢いで投げつけます（笑）
ＧＭ：やってられっかー！な、勢いですね（笑）了解した。

　繁華街を一望できる、高いビルの屋上。
　そこに、独りの人影…その腕に、先ほどの白いカラスが止まる。
　そこからジュリアの行動を終始観察していた彼は、呆れたように口を開いた。

「意外と使えんな。やはり…私が手を下すか」

　そう呟いた瞬間、カラスが羽根を広げ、空へと舞い上がる。
　それに追従するかのように、その人影もまた、月夜の空を飛翔する…

■凶ツ刃　Research 03

　夜の道を歩く少年と少女。
　彼らはまだ気付いていない。
　自分達の背後に…殺意の刃を向けている影があるということを。

ＧＭ：次、弘助のシーンで。
弘助：とりあえず、どっか安全なところ…うーん、安全なところの代表格ってどこだろう？
ジュリア：君ん家じゃないの？
ＧＭ：君ん家だろ（笑）
弘助：じゃあ、自分の家に連れ込もう。
ＧＭ：連れ込むってのも変な表現だなぁ（笑）まぁ、いいや。そうですね、自宅に向かう途中…ってところにしときましょう。
弘助：うん。
ＧＭ：あなたの隣で歩いている少女…そう、あなたは彼女のさっきの言葉が、気になる。「私と一緒にいると不幸になる」って、一言ですね。
弘助：それに関してはちょっと気にかかりつつ、とりあえず俺が一番忘れがちなことを聞きたいと思う。
　「ところで君…名前は？」
ＧＭ：やっと聞いてくれたか（笑）「ミスト…」と、ボソリと呟きます。
弘助：「ミスト、か。…俺は常盤弘助、よろしく」
ミスト（ＧＭ）：「逃げる…なら、今のうち、ですよ？」
弘助：「逃げる？」眉を顰める。「さっきも不幸になるだのなんだの…一体、どうしたっていうんだ？」
ミスト（ＧＭ）：「私に関わると…みんな、不幸に、なるから」
弘助：「？」
ＧＭ：「あの人も、私のせいで…」と言って、彼女は俯いてしまいます。
弘助：「どうか、したのか？」と、覗き込んでみる。
ＧＭ：…覗き込んだ瞬間ですね、彼女はハッと何かの気配に気付き、それに視線を向ける。
弘助：ほう。
ＧＭ：あ、言い忘れたけどアランさんは登場可能としておきます。
アラン：お、そうか。
ジュリア：登場したかったのに（笑）
ＧＭ：この段階で登場されると、ちと困るんだよね（笑）
弘助：こっちも、何か（気配）感じる？
ＧＭ：うん、君も感じるね。彼女の視線の先…そこに、誰かが、いた。
弘助：誰か？

　その気配を察知した瞬間、全身の細胞が警告を発してきた。

　―アレはヤバイ、関わるな。
　　アレは、“そういうこと”に特化した存在だ。
　　関わるな、関わるな、関わるな…

　心臓の鼓動音のペースが急激に上がる。
　同時に、肺がさらに多くの酸素を取り込むべく、より多くの呼吸を促す。
　かつてない、恐怖が弘助を襲った。

弘助：「…！？」と、息を飲み、ズザッと一歩後ずさります。
ＧＭ：その紅い眼は、既に獲物を見定めた鷹のようにギラリと眼光を放っている。そして、それを知覚した瞬間、その人影は既にそこから消え、そこには一枚の赤い布切れだけが宙を舞っていた。
弘助：「…ハァッ」と、気配が無くなったところで…
ＧＭ：（遮るように）と、思った瞬間…そう、その人影は消えたのでない。あなた達との間を一瞬で詰めただけだったのだ！
弘助：なにぃーっ！？「…！？」と、またしても息を飲む。
ＧＭ：そして数メートルもの間合いを一瞬で詰め、銀色の一閃をミストに向けて放つ！
弘助：そこは庇いたい！「やめろーっ！！」自分の爪で受け止める感じで。

大いなる者：神の力を宿したもの、あるいは神の化身そのもの。奇跡に近い力を以って戦うクラス。
この段階で登場されると～：ここでジュリアが登場すると高確率で話が変な方向に向かうための措置。真面目な意味で。
赤い布切れ：魔殺の帯相当品。（サプリメント：ロンギヌス参照）特殊能力一つを封ずる代わりに、能力値が上昇する。

その爪は、武器であると同時に堅牢な盾でもある。
―だがしかし。
その刀は、紙にペーパーナイフを突き立てるかの如く、易々とそれを打ち貫き…弘助の身体を貫いた。

「が、は…っ！？」

血の塊が口から溢れ出る。
今吐いた血なのか、それとも返り血なのか、数滴の血が襲撃者の顔にかかる。

ＧＭ：紅い眼が、君につまらなそうな視線を向ける。そして君に刺した刀を引き抜いていく。
弘助：引き抜かれる刀につられ、前のめりになって、膝をつく。
ＧＭ：「どけ、犬が」息をつく間もなく、ダンッ！と蹴りが入れられる。
弘助：転がっていく、俺。
ＧＭ：邪魔者を排除した後、ミストの前に立ち…「女、お前には同情するが、私の膝元に火種を置くのは少々好ましくないのでな」と、紅い瞳をミストに向ける。既にミストとその人物の間には、餌と捕食者の差が生じている。
そして、ミストはただ、怯え、震えているのみ。
アラン：もうちょっと待ってよう（笑）
ＧＭ：ほい。ではですね、さらに「だが安心しろ。私の言葉が終わる時には、お前は自らの死を知覚することなく、この世から…」
と言っている間に、刀を振り上げ、トドメをさそうとしていますが。
弘助：血まみれの状態で「や…やめ…その子に…」
アラン：そこで登場しましょう。彼の後ろ…少し離れているところから現れ、「やめな、兄ちゃん」
電信柱の影から、カツ･･･カツ･･･と歩いてきます。
ＧＭ：なるほど。振り下ろさんとしていた刀を止め、「私に気配を悟られずに後ろを取る、か…相当の手練と見える」
アラン：「あんたには敵わねぇよ…だがな、それでも、あんたに手痛い一撃を与えることはできるぜ。例えば、その右腕が吹っ飛ぶくらいのな」
？？？（ＧＭ）：「それが、本当にできるとでも、思っているのか？」
アラン：「俺は、そのレディを今殺されるわけにはいかんのでね。だから、あんたには退いてもらいたい」
？？？（ＧＭ）：「それは、できんな」
アラン：「ほう、あんたも退けない理由があるっていうのかい？」
ＧＭ：ただ、ニヤッと笑って返してきます。
アラン：「いずれにしても、俺のダチをあんな風にしてまで…楽に帰しゃしねぇよ」
ＧＭ：では、その"ダチ"という言葉に彼は反応する。「ふむ、あの犬は縁者であったか…急所は外してやったが、放っておけば死ぬであろうな」
弘助：ぐったりとしてます。
アラン：「まあ、そういうことだ。俺には退けねぇ理由ってのが、できちまった」
？？？（ＧＭ）：「それは、すまんことをした…と一応謝っておこう。…だが、お前は事の重大さを、わかっていない」

アラン：「あぁ…もちろん、わかっちゃいない。わかっちゃいないからこそ、こんなことをしている」
？？？（GM）：「愚かな…」
アラン：「愚かっていうのは、前から言われていたよ。だがこういう性分なんでな、気にしないでくれよ」
？？？（ＧＭ）：「性分か。ならば仕方があるまい」
アラン：「あぁ、仕方が無い。さて、退いてもらえないっていうんだったら、俺も…」と言いつつ、袖のところを開けて、銃をいつでも抜けるようにしておきます。
？？？（ＧＭ）：「銃使いか…その程度の銃で、私を討てるとでも？」
アラン：「こいつは、ただの銃じゃねぇぜ？…神を狩ってきた」
？？？（ＧＭ）：「ふ…神を狩ってきた、か。奇遇だな、私も神を殺せる」
アラン：「は、そうかい…じゃあ仕方がねぇや。どうする？先に動いた方が、負けるぜ」
弘助：いい！（笑）
ジュリア：面白いよ、アラン！（笑）

　二人の間に、入る隙すらない…意味結界じみた緊張感が流れる。
　抜き打ちの構えを見せるアラン。
　抜刀の構えを見せる襲撃者。
　互いに必殺の一撃を持っているが故に、先んじて動くことを許されない両者。

　ざあ…と、風が流れる。
　構えを先に解いたのは、襲撃者だった。

アラン：ほう。「…やっと、退いてくれる気になったか」
？？？（GM）「興が削がれた。それだけだ」
アラン：「そうか、俺に取っちゃめっけもんだがな」
ＧＭ：それに対しては「ふっ」と笑い、「だがお前は、お前が選んだ選択肢を後悔することになる」
　そして、あなたのほうに歩み寄る…かと思いきや、そのまますれ違って去っていきます。
アラン：では、そうですね…振り返りもせずに、立ち去ったのを確認した後…
「ふぅ～…おっかねぇ～」（笑）

一同：（笑）
ジュリア：いいキャラしてる（笑）
アラン：「なんだ、あのバケモンは…っと、こうしちゃいられねぇな」と言いつつ…「まったくガキどもめ、手間ぁかけさせるんじゃねぇよ」と、こっち（弘助）に近づいていく。
弘助：それに対しては「が…は…」と血を吐きながら。
アラン：「じっとしてな。お前の家は…この近くだったな。そこの娘も連れて行くぞ」
弘助：「く…そぉ…」
アラン：「喋るな…後でゆっくりと聞いてやるからよ」
弘助：涙をポロポロと零します。
アラン：「まったく…」と言いつつ、今度は少女のほうに近づいていきます。
ＧＭ：ん。少女はですね、さっきのかなり張り詰めた空気…それが解かれた拍子に緊張の糸が切れたのか、気絶しております。まあ、あんなのに睨まれたり殺されかけたりすれば、気絶したくなりますわな。
アラン：…確認してなかったけど、この子（資料の子）だよね？
ＧＭ：うん、そうだよ。
アラン：「この子が…ふ、寝顔も可愛いじゃねぇか、レディ」と言って、抱きかかえる。弘助の家に入っていきます。

　―何も出来なかった。何も、抵抗一つすら。
　圧倒的な力の前に、自分が敗れ去ったのだと思うと…そして、１人の少女すら守ることができなかったのだと思うと、ただ悔しさだけがこみ上げてくる。

　狼はただ、嗚咽の声を漏らすだけだった。

■バー“Ｗ”　Research 04

ＧＭ：ちょっと時系列が前にズレますが、アランさんのシーンにしたいと思います。一応、ジュリアさんは登場可能としておきましょう。
アラン＆ジュリア：はい。
ＧＭ：そうだね、確かコネクションに"バー・W"なかったかな？
アラン：あるよ。
ＧＭ：じゃあ、そこで情報を買うシーン…ってところでいきましょう。
　そこは、静かな、寂れている、だがしかし落ち着いた感じのバーだ。
アラン：カラ、カランっという音ともに、コート濡らして入ってくる。
ＧＭ：入ってきたあなたを見て、マスターのジェイクが「ひでぇナリだな、親友」と言ってきます。
アラン：「半年ぶりか、ジェイク」
ジェイク（ＧＭ）：「あぁ…大英帝国で暴れてきたって？噂は、この極東の地にまで聞こえているぜ」
アラン：「おっと、なるほどね。だから、こういうことになってんのか」
ジェイク（ＧＭ）：「で、一体どうしたんだ？ここに来たってことは、ただ酒を飲みに来たってわけじゃないんだろ？」
アラン：「あぁ、そうだが…まずは酒だ」
ジェイク（ＧＭ）：「あぁ…確か、取り置きのボトルがあったはずだ」
アラン：「…ありがとう」
ＧＭ：あなたが、半年前に置いて行った酒、バーボンかな？それをグラスに注いで、君に渡す。

私も神を～：この時点で、彼の持っている刀はそうとうヤバイ代物であるということがわかる。
ふぅ～…おっかねぇ～：アランのキャラクター性を表しているセリフだと思う。
バー“Ｗ”：ウィザードの溜まり場と化しているバー。裏は情報屋。
　　マスターはジェイク・神埼。
ジェイク・神埼：バー“Ｗ”のマスター。幅広い情報網を持っている情報屋にして、かなりの実力を持ったウィザード。

アラン：パシっと受け取って、それを飲む。「…うまいな」
ジェイク（GM）：「あんたの酒を見る目は一流だからな」
アラン：「言ってくれるぜ…で、ジェイク。ここに来た用件だが」
ジェイク（GM）：「あぁ、ただの用件じゃねぇってことは、大体察しがつく」
アラン：「あぁ、この子を知らねぇか？」と言って、ジェイクに例の写真を見せる。
GM：「なるほど…ちょっと待ってな」と言って、ジェイクはカウンターの奥の方に行く。で、しばらくすると戻ってきます。
アラン：ふむ。
ジェイク（GM）：「この子、か。確か、３年前の行方不明者リストの中にいたはずだ」
アラン：「３年前、行方不明…か」
GM：「だが妙なことにだな…」と言って、しばらくジェイクは黙ります。「本当なら、ここで金をせびるところだが…まぁ、昔のよしみだ。あんたになら話してもいいだろう」
アラン：「助かるよ、ジェイク」
ジェイク（GM）：「この子が行方不明になった時、様々な組織が躍起になって探していた」
アラン：「ほう、つまり…何かお宝を持っていたってことか？」
ジェイク（GM）：「まぁ、そういうことになるだろうな。なんせ、あの絶滅社まで狙ってたくらいだ」
アラン：「そういうことか…よくはわからないが、彼女は何らかのキーを持っているということか」
ジェイク（GM）：「そういうことだ。まぁ、俺も詳しくは知らんし…そこまで深く立ち入ると、俺の首も危ねぇんでな」
アラン：「あぁ、わかっている。だが、助かったよ」
ジェイク（GM）：「なに、俺とお前の仲だろう？」
アラン：「それに関わった組織っていうのは、どんなのだ？…絶滅社…一条家も入っているだろう？」
ジェイク（GM）：「あぁ、一条家も入っている。…聞いて驚くな、あの"ロンギヌス"でさえ、躍起になって探してたくらいだ」
アラン：「“ロンギヌス”…ほぉ」
ジェイク（GM）「あのアンゼロット指揮下の組織が動くくらいだ、相当な何かを抱えているんだろうな」
アラン：「ともすると、また世界存亡の危機ってやつかな」
ジェイク（GM）：「そういうことになるな。ま…俺達にとっては日常茶飯事だが」
アラン：「あぁ…そういうのから守るために、俺達はいるんだ」
ジェイク（GM）：「とりあえず、仕事の成功を祈って乾杯しといてやるよ」
アラン：「あぁ…」

　カンッ…とグラス同士が当たる音が響く。
　久々の日本で飲む酒は、格別の一杯だった。
　願わくば、この杯が最後の杯とならぬよう、密かに心の中で願った。

■Mr. Black　Research 05

　出会いは神の御意志なれど、それがいつ起こるかは自分にはまだわからない…いや、聞こえない。
　そして、その出会うべき人物とどのような関係になるかも、自分にはまだ聞こえないのだ。
　自分はまだ、その位置には立っていない。

ＧＭ：ジュリアさんにシーンを回したいと思います。時系列的には、さっき（リサーチ3）のシーンに並びかけているところ。このシーン終わったら並ぶかな？ってくらいです。
ジュリア：あぁ、ところで…さっきの白いカラスには見覚えありませんよね？
ＧＭ：特には。“陰陽師”の《式神》か、“魔物使い”の魔物か…色々と察しはつくとは思いますが。そこまで大した力も持ってなさそうかな。伝書代わりに使える程度だと思っていただければ。
ジュリア：ふむ。ところで、これ（自分）の情報収集手段ってさ、ただ歩くだけだと思うんだけど（笑）
ＧＭ：た、確かにそうかもしれん（笑）あなたが相変わらず雑踏を歩いている時…あなたに着いて来る何かの気配がする。あまりよくない気配ではあります。
ジュリア：ふむ…では、それはですね、さも気付いていないかのように普通に歩いていこうと思います。
ＧＭ：そうやって、あなたが歩いていると、あくまでも一定の距離を保ちながら、機械的にその気配も着いてきます。
ジュリア：なるほど…それはですね、わざとショッピングを楽しんだりですね、回り道をしたりですね…（笑）
　焦らしまくった上で、最終的に人気のないところにいくと思います。
弘助：すごい可愛らしい服とか売ってるところに行ったりするんだろうな（笑）
ジュリア：そうですね、男の人がいたら絶対追い出されるようなファンシーショップといかに行ったりですね（笑）
ＧＭ：具体的には、最後に行くのは…？
ジュリア：通りから１本外れた、路地裏の奥あたりで。
ＧＭ：じゃあ、あなたが路地裏に入り、もうすぐ奥に着くくらいの時…
ジュリア：「ふう…」と息をついてですね、「そろそろ、姿を見せては貰えませんか？」と言って、後ろを振り向きましょう。
ＧＭ：そこには、全身黒ずくめの男が立っている。「…あなたが、ミス・クラークですか？」
ジュリア：「ええ、そういう貴方は？」
黒ずくめの男（GM）：「私に名乗るような名前は、存在していません」
ジュリア：「では、“Mr. Black”…一体、何の用で

ロンギヌス：アンゼロット直下のウィザード組織。世界の守護者としての役割を担っているはずだが…その実、アンゼロットの下っ端集団と化しているのは何とも言い難い。優秀ではあるのだが。
陰陽師：忍者と同じく、日本古来から存在するウィザードのクラス。
　　阿部晴明などが有名。
式神：陰陽師の特殊能力。術によって生み出された使い魔を使役する能力。
これの情報収集手段～：確かに、そこかしこに聞き回ってる姿は想像できない。

すか？」
黒ずくめの男（ＧＭ）：「これ以上、あなたはこの件に関わるべきではない…手を引きなさい」
ジュリア：「これだけ時間をかけておいて、言うセリフはそれだけですか？」
黒ずくめの男（ＧＭ）：「上の者には、事は穏便に済ませるようにと、教えられていますので」
ジュリア：「あなたが何に従う者かは知りませんが、私は神の声に従っています。私の行いを止めることができるのは、神のみ」
黒ずくめの男（ＧＭ）：「…譲歩する余地は無い、と認識してよろしいのですね？」
ジュリア：「ええ、それでかまいません」と、笑顔で答えます。
ＧＭ：では、それとは対照的に、あくまで無表情に「そうですか…仕方ありません。あなたを排除するより他はないようです」と言って、懐から銃を抜こうとする！
ジュリア：じゃあですね…「ですが…神はまだ、戦うなと申しています」と言ったあと、ドンッという音と共に《バーストジャンプ》で切り抜けたいと思うのですが、どうだろうか？
ＧＭ：了解。

　爆炎が収まった路地に、１人黒ずくめの男が取り残された。
　男が懐から携帯電話を取り出し、とある番号をコールする。
　数回のコールの後、男は「交渉は、不成立です」と、無機質に呟いた。

■少女の記憶　Research 06

　私がまだ小さい頃の話です。
　私は、私が名前も知らない街で生まれました。
　その時の記憶は曖昧で、父と母の顔すらも、もう思い出せません。
　覚えているのは、するだけで喉を痛めてしまいそうな咳、自分の体温とも思えないほど熱い熱、星空、お父さんとお母さんの声、そして…
　やさしい光と、舞い降りてくる誰か。
　その時から、奇跡の力が私に宿ったんです。
　でもその力は―

ＧＭ：というわけで、弘助君。登場していいよ。そう、さっきのを、君は夢の中で見ていた。
弘助：「…？」と、目覚めます。
アラン：俺はいていいのか？
ＧＭ：ん。今回はいいと思います。
アラン：「気付いたか、ボウヤ」
弘助：「アランさん…ぐっ！」と、傷を押さえる。
アラン：「痛がるだけ、大分回復したな。まったく、大した回復力だよ、お前は」
弘助：「俺は…あいつに…？…ミストは！？」
アラン：「あぁ、隣の部屋で寝かしてあるぜ」
弘助：「そう…ですか」
アラン：「あぁ、イタズラもしていない」
弘助：「そんなことをしたら…本気で怒りますよ。それにしても、ありがとう、ございます」
アラン：「まったく…死ぬかと思ったぜ」
弘助：「俺も死にかけましたよ」
ＧＭ：そこで弘助は気付くんだけど…君は人狼であるが故に、人以上の回復力を持っている。この程度の重傷を負うことも度々あった、だが…今回はいつもより若干直りが遅い気がする。
弘助：それではですね、「うっ…ぐ…かはっ」と、咳き込む。
アラン：「…大丈夫か？」
弘助：「あれ、おかしいな…？いつもなら、こんな傷…」と、咳き込んだ時に出た血で手がべったりと汚れている。
アラン：では、そこで「チッ」と舌打ちをした後ですね、「ふむ、あの時のサムライブレード…タダもんじゃなかったか」
弘助：「何か、魔法か何かでも…かけてあるんですかね？」
アラン：「だろうな…いずれにしても、尋常じゃねぇ」という風に言いつつ…「俺には、お前の傷を治してやれるような力はねぇが…」なんかできるのかな、俺？（笑）
弘助：「いえ…ここまで運んでもらって、あの子を守ってくれただけでも…」と。「それにしても、あの子…」とちょっと浮かない顔で。「あの子が、変なことを…」
アラン：「変なこと？」
弘助：「私といると不幸になるとか、何とか…」
アラン：「そうか…３年前、あの子…行方不明事件に巻き込まれたんだ」
弘助：「行方不明？」
アラン：「どうやら、その時に…かなり大きな騒動があったらしい」
弘助：「具体的には、どのくらい？」
アラン：「“ロンギヌス”が動くくらいだ」
弘助：「そんなに！？」
アレン：通じるのかな？（笑）
ＧＭ：多分、通じると思う（笑）
アラン：「ああ…つまりは、世界存亡の危機ってやつだ。そう、彼女を巡って…それらの組織が動き出す。彼女の中に何かが隠されているとすれば、それはとんでもないものだ」
弘助：「そう、ですか」
アラン：「あぁ、そうだな。考えられるとしたら“大いなる者”ってところか？まぁ、詮索してもしょうがないな。…あの子に直接問いただして、わかることかね？」
弘助：「わかりません…でも、どちらにしても、あの子…捕まることを望んじゃいない…」
アラン：「ふぅ…実のところ、俺もあの子を捕まえに来たんだよな」
弘助：「それじゃあ…！！」と、ちょっと殺気立つ。
アラン：「それじゃあ、なんだ？…お前はその傷ついた体で、俺に勝てるとでも思っているのか？」

バーストジャンプ：火属性魔法。小規模な爆発を発生させ、通常よりも高い跳躍を行う魔法。欠点は爆発とその音。
魔法か何か～：そんな生易しいものではないのだが、弘助達はそれを知る由も無い。

弘助：「！！…それでも、あの子を攫うっていうのなら…！」
アラン：「…よせよ、冗談だ。といっても、そういった依頼を請けたのは本当のことだ。動いているのは一条家」
弘助：「一条家が…」
アラン：「あぁ。それ以外に、どこぞの吸血鬼聖職者も動いている」
ジュリア：ひどい言い方だぁ（泣）
弘助：「吸血鬼聖職者…あぁ、ジュリアさんか」
ジュリア：しかも通じてるっ！ひどい！（泣）
アラン：「もっとも、彼女が狙っているのは、一条家の陰謀を阻止することだろうから…まぁ、あの子を狙っているわけじゃなさそうだな」
弘助：「そう…それなら、よかった。それにしても、依頼を請けたのに、あの子を守って…これからどうするんです？」
アラン：「なぁに、俺はハンターである前にウィザードなんだ。エミュレイターを狩るのが仕事であって、エミュレイターに与しているような一条家とは、馴れ合いはしねぇよ」
弘助：「…そうですか。それにしても、あの子に何が…？」
アラン：「さぁな。いずれにしても、これを早く片付けなきゃ、俺も、お前も、世界も、大変な目にあうぜ」
弘助「そう、ですね…」
アラン：「よし、じゃあお前はさっさと寝ろ」
弘助：「でも敵が来たら…」
アラン：「いいから寝ろ、俺が見張っている。お前は戦えやしねぇんだから、今は眠って…身体を休めろ」
弘助：「わかりました…すいません、何から何まで」
アラン：「いいってことよ。俺はジェントルマンだからな」
弘助：「おやすみなさい」
アラン：「あぁ、おやすみ…ボウィ」
弘助：それじゃあ、ゆっくりと身体を横たえ…体力回復のために眠りにつきます。
ＧＭ：じゃあ、身体を横たえた時…そう、部屋の隅に“ブラウニー”が、じっと君を見ている。
弘助：「…どうしたんだ？」
ＧＭ：ブラウニーは、スッと窓の外を指差す。
弘助：そっちを見ます。
ＧＭ：電線の上に何か止まってるけど、何かはよくわからないね。なんか白っぽいけど。
弘助：「あれは、なんだ…？」といって、起き上がってもう一度よく見えるように近づく。
ＧＭ：そこには、１羽の妙な白いカラスが止まっていた。部屋のほうをジ～っと見ている。
アラン：「どうしたんだ？」
弘助：「いえ、なにか…」
ＧＭ：…しばらくの間、そのカラスと君達の睨み合いが続く。
アラン：特に覚えはないよな？
ＧＭ：得には無いね。
アラン：「ただの、カラスじゃねぇか。お前は早く寝ろ…」
ＧＭ：ただのカラスと言われた瞬間、そのカラスは飛び去っていく。
アラン：「ほらな、なんにもねぇよ…お前の心配するようなことは」
弘助：「そうですか…？なんか、気になって」と言って、もう一度ブラウニーのほうを見る。
ＧＭ：どこには、もうブラウニーの姿はない。
アラン：「奴さんも帰ったことだ、早く寝ろ」
弘助：「ええ…わかりました」
アラン：では、小声でボソッと「狼の、生存本能か…」
ＧＭ：特に何も無ければ、ここでシーンをカットしておきましょう。

暗い部屋の中、意識を取り戻した少女は、その一部始終を…望まずして聞いてしまった。

―己の力によって、また誰かを傷つけた。

その被虐的ともいえる自責の念が、彼女の心を締め付ける。

「また…私の、せいで…」

雫が、布団の上に小さなシミを作った。

■春日 吹雪　Research 07

その銀髪の少年は、ビルの屋上から街を見下ろしていた。
ここからなら、街を一望することができる。
ここは、彼にとって密かな…彼だけのお気に入りの場所だった。
しかし、予期せぬ来客がそこに訪れたのだ。

ＧＭ：その銀髪の少年は、フェンスの上に腰掛け…下の街を、ただ見下ろしている。
ジュリア：ではそうですね…そこでキイッ、という音と共に屋上のドアが開き、コツ…コツ…コツと、そちらに向かって歩いてくる人が、１人。
ＧＭ：君が、そうやって歩いてくるのにも意を介さず、ただ街を見下ろしている。
ジュリア：何かリアクションが欲しいです（笑）
ＧＭ：了解（笑）ではそうですね、すぐ真後ろまで来たあなたのほうを、彼はチラ…と興味無さそうに見て「なんだ、お前か」と言います。
ジュリア：「なんだ、とはないでしょう。一応、古い知り合いなのですから」
？？？（ＧＭ）：「それも、そうだな…ジュリア。それで、何の用だ？私が彼の“大いなる者”を狙っているのが、そんなに不服か」
ジュリア：「ええ、不服です」と正直に言います。
？？？（ＧＭ）：「…何故？」
ジュリア：「彼女が持つ力が、どのようなものかはわかりませんが…いえ、わからないからこそ、彼女

吸血鬼聖職者：まぁ、こんなのは世界に数えるくらいしかいないだろう。
通じるのも無理は無い。
白いカラス：“鴉”ではない。念のため。
フェンスの上に腰掛け～：結構危ない。よい子は真似しちゃだめ。

の持つ力が、私の信ずる神の力の可能性もある」
？？？（ＧＭ）：「お前の信ずる神、か。だがしかし、こうも考えられる…神の力がこの地に降りた時、災いが起こるとも」
ジュリア：「いえ、それは災いなどではありません。神の試練です」
ＧＭ：トンッと、フェンスを降り…彼はあなたの方に向き直ります。銀色の髪が風に流れ、宝石のような瞳があなたを真正面から見据える。「お前といい、彼の宗教を信ずる者達といい･･･そうやって試練と言っていれば、何でも済むのだな」と言います。さらに、「私は生憎、そういうのが嫌いだ」とも。
ジュリア：「あの者達と一緒に考えて欲しくはないのですが。あの者達といい、絶滅社といい…神の声を自らの意思によって捻じ曲げている」
？？？（ＧＭ）：「…私にとっては、どうでもいい問題だ」
ジュリア：「では、もう少し…わかりやすく言いましょう。私は、“あなたに”一条家の陰謀を止めるように“言われている”のですが？」
ＧＭ：「……ああ、“そういうことに”なっている。そのことについては知っている。だからこそ、私は彼女を殺さねばならんと考えている」そして、さらに付け加えるように「そしてそれが、春日の総意でもある」
ジュリア：「…負け犬の思考ですね」
ＧＭ：聞き流しています。
ジュリア：ほう。聞き流しているのであれば続けます。「危険であるから消去する。敵に奪われるのが嫌だから消去する。そのような思考では、貴方達の一族が衰えるのも当然ですね」
ＧＭ：「…く、くくくっ」と彼は彼は笑い、「…確かに、私の下にいる乾物ジジイどもに、その言葉はピッタリ合っているな」と、言う。
吹雪（ＧＭ）：「だが…私はその前に、守りきれぬものを守るなどと言う、その性根が気に食わんだけだ」
ジュリア：「そうですか」と言って、踵を返します。
吹雪（ＧＭ）：「…止めに来たものだと思っていたのだがな」
ジュリア：「今はまだ、私に彼の者の声は届きません。私は、私の意思…そして人の意思を、彼の者の声なしに曲げることはしません」
吹雪（ＧＭ）：「ふん…好きにするがいい」
ジュリア：今度は完全に立ち去ります。

■英国紳士　Research 08

少女は、力がありながら、守りたいものを守れないという。それどころか、誰かを傷つけてしまいかねない、とも。
だが、それは違う。
本気で誰かを守りたい、と願うのならば…魂はそれに応えてくれるはずだからだ。

ＧＭ：アランさんのシーンにしましょう。
アラン：どういうふうに、進めるアルか？（笑）
ＧＭ：ん～そうアルねぇ･･･おい、やめないか、これ（笑）
一同：（苦笑）
アラン：正直、ミストと会話をしたいというのがある。実質喋ってないしなぁ。
ＧＭ：確かに。
アラン：それじゃあ、ミストと会話するシーンにしてもらいたいです。
ＧＭ：了解。
アラン：サッ、と彼女のいる部屋のカーテンを開ける。
ＧＭ：彼女は既に起きていた。目が充血して赤い。
アラン：「眠れなかったのか…？」
ミスト（ＧＭ）「…（コクリと頷く）」
アラン：「無理も無い、あんな目にあったんじゃな」
ミスト：「…そうじゃ、ないん…です」
アラン：「うん？」
ミスト（ＧＭ）：「私のせいで、あの人が…傷付いてしまった、から」
アラン：「お嬢ちゃんは、優しいな」
ミスト（ＧＭ）：「優しくなんか、ありません…！こんな、人を不幸にする力を持っている私が…優しい子なわけ、ないじゃないですか…っ」
アラン：「…お嬢ちゃんは、まだ若いな」と言いつつ、ホットココアを渡す。「人間ってぇのは、誰しも周りに迷惑をかけなきゃ生きていけない生物なんだよ」と言います。
ミスト（ＧＭ）：「でも、私のは…きっとそんなものじゃ済まされないんです」
アラン：「世界を巻き込んじまうような、か…」
ミスト（ＧＭ）：「もしかしたら、そうかもしれません」
アラン：「君の肩には、重い話だな。だけど、お嬢ちゃん…それは今悲しんだって仕方の無いことだ。それは運悪く、あんたが手にしてしまったもの。だから、それをいきなり手放すことができるはずもあるまい。今はただ、どうやって生きるかを考えるべきだ」
ミスト（ＧＭ）：「どうやって…生きるか…？」
アラン：「まずは、自分が立っている場所を確認することからだな。そんな、おぼつかない足取りじゃあ、すぐに喰われちまうぞ？さて…向こうの奴もそろそろ起きていく頃だ。ちょっと向こうに行ってくるが…着いてくるかい？」
ＧＭ：それに対しては、コクリと頷きます。
アラン：それでは、隣の部屋に行って…「おい、起きろ」
弘助：「ん…あぁ…はい、おはよう、ございます」
アラン：「寝ぼけてんのか、お前は」
弘助：「えっ…と」
アラン：「ほら、お前にもホットココアだ」
弘助：「あ、ありがとうございます」と、クイッと一気に飲み干します。
アラン：では、一歩引いて…「ほら、お嬢ちゃん…礼を言っておきな。こいつがいなかったら、あんたは今ごろ…」

私は“あなた”に～：この時点で、オープニングで出てきた“春日吹雪”は本物ではないことが判明した。
乾物ジジイ：気持ちはわかるが、お年寄りは大事に。
～アル：エセ中国人をやるならこれ。にしても、何でアランのプレイヤーはいきなりこんなことを口走ったのだろうか？謎である。

ミスト（ＧＭ）：「あの…ありがとう、ございました…」
弘助：「……」
ミスト（ＧＭ）：「それと、ごめんなさい…私のせいで、こんな目に…」
弘助：「君のせいじゃない。仕掛けてきたのは、あいつだ」
ミスト（ＧＭ）：「でも、あの人は私を狙ってきました…。だから、それは…私のせいでも、あるんです」
弘助：「でも…でも、君を庇ったのは、俺の意思だ。それに、力がある奴が、君のような力の無い者を守るのは、当然のことだ」
ＧＭ：いい主人公だ（笑）
弘助：そう、自分の故郷にいるフ抜けた奴らを思い出して、言うわけですよ。
ミスト（ＧＭ）：「……なにが、あなたを…そこまでさせるんです、か？」
弘助：「なにがって、そりゃあ…」
ミスト（ＧＭ）：「私には、全然…わかりません。力があっても、誰も守ることができない、私には…全然わかんないです」
アラン：じゃあそこで声をかけようか。「それはな、お嬢ちゃん…力があるかどうかじゃなくて、その人を本気で守るかどうかっていう、魂の話なのさ」
ＧＭ：くそっ！そこの英国紳士、全部持っていきやがったっ！？（笑）
ジュリア：主人公とヒロインのいい場面かと思いきや、この英国紳士めぇ！（笑）
ＧＭ：主人公、ここ怒っていいんだぞっ！？（笑）
アラン：主人公、負けんじゃねぇよっ！（笑）…と、（さっきのセリフを）言いつつ、ズズッと珈琲を飲む。「おっと、すまねぇな…こいつは野暮だったか。ちょっと隣の部屋に行ってくるわ」といって、その部屋から出る（笑）
ＧＭ：…逃げやがった（笑）
ジュリア：くっそぉ…（笑）
アラン：へっへっへ…おいしいところは貰っていったぜ（笑）
ＧＭ：（気持ちを落ち着けて）あ…弘助君、続けていいよ（笑）
弘助：わかった。さっきのセリフを言われて、彼女はどんな感じ？
ＧＭ：今にも泣き出しそうな感じですね。
弘助：「…アランさんが言ってるみたいに、ちょっと難しいことはわかんないけどさ。昨日の夜…君、追っかけられてたろ？あの時の怯えた顔見て、こんな怯えた顔させたくないって…そう思ったから、俺はここまでやってきたんだ。それに、昨日も言ったろ？男が女を守るのは当然のことだって」
ミスト（ＧＭ）：「やさしいんですね。あなたは…」
弘助：「そんなんじゃないよ、自然に生きているだけさ」と言って、ニカッと笑います。
ＧＭ：それには、彼女もつられてクスッと、ちょっとだけ笑います。
弘助：「やっと笑ってくれたね」
ＧＭ：ちょっとだけ驚いたような顔を彼女はします。
弘助：そこで、ポンッと頭に手をのっけて…
「君の持っている力が、どんなのかわからないけど…そういう風に、周りの人を不幸にするって、人を遠ざけてきた…ずっと寂しかったろ？だったら、俺がずっと側にいてやるよ…不幸だってさ、全部俺が跳ね返してやるから！」

まったく、どこまでも青臭いガキどもだ。
だが、それも悪くは無い…か。
カップに残った珈琲を一飲みにすると、アランは煙草に火をつけた。

「がんばれよ、少年…」

■神の僕　Research 09

ジュリア：マスター、次はそこに登場したい。彼（弘助）が包帯を巻きなおしているところなんてどうでしょうか？
ＧＭ：ＯＫ。いいね、それでいきましょう。では、弘助君…君は傷口を塞いでいた包帯を巻きなおそうとしている。
弘助：はい。
ジュリア：傷はまだ治ってないんですよね？
ＧＭ：外傷は大分塞がっているが、中の傷がまだ癒えていないってところかな。「傷、まだ治ってないんですね…」と、ミストが…って、包帯解いてるところに女の子がいるって変な気がするなぁ（笑）…まぁ、それはそれでありか。
弘助：「あぁ…そうみたいだな」と言って、包帯をベリベリと剥がして「痛っ！」とうめき声をあげる。
ジュリア：そこに登場します。「お困りのようですね、コウスケ。神の加護は必要ですか？」と、言いながら弘助の後ろに登場（笑）
ＧＭ：ば、ばかな！？（笑）
弘助：「うわぁぁあぁっ！？」と、後ずさります（笑）
ジュリア：シスター服を来た少女が、そこに立っています。
弘助：「じゅ…ジュリアさん！？驚かさないでくださいよ」
ジュリア：「この程度の事に驚くとは…まだ、あなたは神の声を聞けていないのですね」
弘助：「えっと、それは悲しんでいいやら…喜んでいいやら…」と、複雑な顔をする。
ジュリア：「まぁ、それはともかく…」と言って、「どうやら大したものに襲われたようですね」と傷口を見ながら言います。
弘助：「俺なんか、全然敵わなくて…銀髪で紅い眼の…」
ジュリア：それを聞くと、ピクッと反応しますが「なるほど、大変なものに襲われましたね」と言います。
弘助：「あぁ、いつもならすぐ治るはずの傷なのに、まだ治ってなくて…」と傷口を見ながら言う。

くそっ！そこの英国紳士〜：アランのシーンなのだから、彼がいいセリフを言うのは当然と言えば当然だが…やっぱり悔しい。
包帯解いてるときに女の子が〜：考えすぎ。
弘助の後ろに登場：いくらなんでも唐突過ぎるぞジュリアさん。

ジュリア：「また…厄介な…」と、弘助の胸に手を伸ばす。
弘助：「…え」と驚く。
ジュリア：傷口に沿って、指をスゥッと滑らせます。
弘助：それって、すごく痛くないですかっ！？（笑）
ジュリア：ええ、それと同時に《レイ・オン・フィンガー》を使用します（笑）指を傷口に這わせていくと同時に、そこに癒しの力を流し込む。
弘助：「え…痛く、ない？」
ジュリア：あなたが驚いている時には、既に手を離しています。そして、「神の加護は、偉大です」と言います（笑）
弘助：「ジュリアさん、こんなこともできたんですね」
ジュリア：「ええ、あの時はまだ、このようなことはできませんでした」
弘助：「なんにせよ、ありがとうございます」
ジュリア：「ええ、こちらとしても…礼を言いたいです」と、ミストのほうを見て…
ＧＭ：ゴメン、気絶してる（笑）
ジュリア：なにぃ～っ！？（笑）では、気絶しているミストを見て「この少女を守っていただけたようですし」
弘助：「ああ、それなら…あっ！？」と気絶していることに気付きます（笑）
アラン：登場したくなってきた（笑）「ただいま～」と、部屋に入り…
ジュリア：そこにはですね…上半身裸の奴（弘助）とですね、シスター服の女（ジュリア）がですね…（笑）
アラン：気絶しているミストに纏わり付いてるんだよな…「おい、スマートじゃねぇな、お前ら…ちゃんと順序は踏むもんだ」（笑）
弘助：「ま、待って下さい！何と勘違いしてるんですかっ！？」
アラン：「何を言ってるんだ…よりによってレディを気絶させて、こんなことをするなんて」（笑）
弘助：「ご、誤解ですアランさ～んっ！？」（笑）
アラン：「ジュリアもジュリアだ、一体何をしてるんだ修道女！」
ジュリア：「神の御意志です」（笑）
アラン：「神の御意志！？…お前が修道してるのは、どんな宗教だ！」
弘助：「ミスト、起きてくれ！誤解を解いてくれ～っ！！」
ＧＭ：といった、ところで…

小さな部屋に、喧騒の嵐が巻き起こる。

―喧騒の主役である彼らは気付いていない。

電線の上から白いカラスが、自分達を観察していたことを。
カラスは翼を広げ、バサッ…と飛び立つ。
飛び立つ先には、銀髪の少年。

腕に止まり、耳打ちするかのように嘴を動かした後、カラスは再び空へと舞い上がる。

それを見、彼は
「少々…方針を変えてみるか」
と、呟いた。

■思惑　Research 10

ＧＭ：それじゃあ、次はアランさんに回そう。そうだねぇ…時系列的にはさっきのシーンの前あたりかな。あなたの“０-Ｐｈｏｎｅ”に着信が入る…ディスプレイに表示される番号は、“鴉”のものですね。
アラン：「やっと呼び出しか…」と言いつつ、着信ボタンを押そう。
“鴉”（ＧＭ）：「Ｍｒ.クルーガー…少々来て頂きたいのですが」
アラン：「ほう、どこへだ？」
“鴉”（ＧＭ）：「そうですね、あなたのよく行っている場所…で、どうでしょうか？」
アラン：「ああ、いいぜ。場所はわかってるな？」
“鴉”（ＧＭ）：「ええ」
アラン：「じゃあ、先に行ってるぜ」と言って切る。「また、難癖つけられたりするんじゃねぇだろうな？」と言って歩き出す。
ＧＭ：了解。そう、それが１時間前くらい前の出来事だった。そして今、　"バー・W"の隅の席に“鴉”と君が向かい合って座っている。
アラン：「で、“鴉”さんとやら…何の用件だい？」
“鴉”（ＧＭ）：「あなたに、伝えたいことがあります」
アラン：「ほう？伝えたいこと、ね…いい報せかな、悪い報せかな？」
“鴉”（ＧＭ）：「それをどう認識するかは、あなたの自由です」
アラン：「じゃあ、伝えてくれよ…さっさとな」
“鴉”（ＧＭ）：「…彼、一条灯夜の行っている研究について、です」
アラン：「教えてくれるのかい？」
ＧＭ：それに対しては無言です。そして続けるように「彼が行っている研究は、完全な“賢者の石”を作り出すことです」
アラン：「“賢者の石”…それで？」
“鴉”（ＧＭ）：「彼が何のために、その研究を行っているのか、私は詳しく知らされてはいません。…ですが、確実に言えることは、それが完成すれば混乱が起こるということです」
アラン：「なるほど」
“鴉”（ＧＭ）：「やがて、多くの者がそれを求め、争いが起こるでしょう」
アラン：「“賢者の石”の研究、か。そりゃあそうだろう…それで、その研究にあの少女が関わっている、と」
“鴉”（ＧＭ）：「（頷き）彼の研究が完成すること…それはあなた方にとって、最も望ましくない結

レイ・オン・フィンガー：天属性の回復魔法。初歩的な魔法だが、軽い負傷くらいなら癒すことができる。
気絶してる：そりゃあ、後ろから唐突に現れれば気絶の一つや二つはしたくなる。
賢者の石：高純度のプラーナ（生命力）の塊。賢者の石の力は様々な方面に応用することができるが、その精製は禁忌の領域に限りなく近い。サプリメントの『ロンギヌス』では《遺産》としてのデータが掲載されている。

末…違いますか？」
アラン：薄く笑って、「それはそうだ。俺達ウィザードにとっちゃあ、それは恐ろしい結末…と言うしかないだろうな」続けて、「“鴉”さん…教えてくれてありがとう。だが…あんた、何者だ？」
“鴉”（GM）：「それは、私にも理解しかねます」
アラン：「自分で…わかってないのか？」
“鴉”（GM）：「あなたがそう言うのであれば、そうなのでしょう」
アラン：「ふ、何にしても…ありがとうよ。これは、一条には秘密なのか？」
“鴉”（GM）：「ええ…これは私の独断です」
アラン：「…そうか。飲みな、これは俺の奢りだ」
“鴉”（GM）：「…私には、酒の味などわかりませんが」
アラン：「じきに慣れていけばいいさ、“鴉”」

寂れたバーの片隅で、グラスを鳴らす音が響く。
男がはじめて飲んだ酒の味は、はたしてどんな味だったのだろうか。
それは、自分には一生かけても理解できないかもしれない。

■決意　Research 11

彼女の力が何なのか、自分には正直わからない。
だけど、力には必ず意味がある。
ただ、彼女はそれに気付いていないだけだ。
だから…だから、自分は彼女の力になってやりたいと、心の底から思った。

弘助：ちょっと（ミストと）話させてもらいたいんだけど、いいかな？
GM：ん。（場所は）家かな？
弘助：家のほうがいいな。
GM：了解です。
弘助：「ところで、少し話したいことがあるんだけど、いいかな？」
ミスト（GM）：「…なんですか？」
弘助：「君の、その力のことなんだ。光の中にいた、誰かとか…関係があるかもしれない」
ミスト（GM）：「あなたが、なんで…そのことを？」
弘助：「痛い咳と、熱い熱…それに、君の父さんと母さんの声かもしれない…そして、光の中の誰か…そんなのが、俺の夢の中に出てきたんだ」
ミスト（GM）：「多分、それは…まだ私が小さい頃の話です。その頃の記憶は、もう曖昧になっているんですけど…ただ、多分…あの時、私は死ぬはずだったかもしれないんです」
弘助：「その…光の中に包まれた誰かが…」
ミスト（GM）：「そう、私を助けてくれたんです。それと同時に、私に力をくれたんです。でも、その力のせいで…」
弘助：「何が、あった…」
ミスト（GM）「私に関わっていった人は、みんな…死んでいったんです」
弘助：「３年前のも、そうなのか？」
ミスト（GM）「その時まで、私は親類の家を転々としていました。そして、最後に引き取られた親戚も…」
弘助：「そう…か」
ミスト（GM）：「多分、私の力は…災いを招くんです。難しい言い方をすれば、そう…因果を曲げてしまうほどの力が、私にはあるんだと思います」
弘助：「どうして、そんな力を…その人は、渡したんだろう」
ミスト（GM）：「私にも、それはわかりません。何で私がこの力を受け取らなければならなかったのか、それは私自身にもわからないんです」
弘助：「だったら、それを見つけてみよう」
ミスト（GM）：「…見つける？」
弘助：「そうだ、このまんま、自分の周りにいるからって遠ざけてちゃ、何も始まらない。何で、この力が君に身についたのか、何で君なのか、それをみつけるんだ！俺も探す！」
ミスト（GM）：「それが…私に、できるんでしょうか？」
弘助：「できるさ！そのために、その誰かは力を与えたんだし…その間に不幸が来るってんなら、全部俺が追っ払ってやる！！」
ミスト（GM）：「…見つけて、みようと思います…この力を、持った理由を…」
弘助：「うん、そうしよう」と言って微笑む。

窓から柔らかな光が射し、２人を…いや、もう１人いた。
部屋の隅で、ただじっと２人を見つめる、小さき者の姿が、そこにあった。

■騎士と姫君　Research 12

はるか昔。
自分がまだ、“人間”だった頃。
私も人並みに“騎士”に憧れていた。いつ、自分の前に現れてくれるのだろうと。

―それから、永い時が過ぎた。
まだ、私の前に騎士は現れない。
それでもいい。今は神の言葉があるのだから。

ジュリア：GM、これは予想なんだけど。
GM：うん？
ジュリア：もうシーン的にさ、うちってメインに来るシーンはもう無いよね？（笑）
GM：（ボソッと）…よくわかったな（笑）
一同：（笑）
GM：じゃあ、そこのアランとジュリアにシーン回しちゃおう。なにかやりたいことあったら、今のうちにやっておくように（笑）割とシーン数に余裕あ

小さき者の姿：ブラウニー。
うちってメインに来る～：深読み禁止～。

るんで。
ジュリア：んー…変なのが浮かんだ（笑）私が先でいいかな？
アラン：いいよ。
ジュリア：彼（弘助）の家の見えるくらいの近くでですね、人気の無い場所…公園のベンチですかね。多分、近くにあるよね？
ＧＭ：あるね。
ジュリア：公園のベンチに座って、虚空を見上げる。で、こう呟くわけです。「なるほど…神よ、そうすればよいのですね？」（笑）
一同：（爆笑）
弘助：あぶねぇ、間違って出なくてよかった（笑）
アラン：やべぇ、面白い（笑）「あん？…何と喋ってやがるんだ？」と、登場する。
ジュリア：アランの方を見ないでですね…「神よ、今日はここまでで」（笑）「あぁ、アラン…少々、神と話をしていました」
アラン：「（呆れたように）神と、会話かぁ…」と、ジュリアの方を見ずに天を見上げつつ（煙草の煙を吐く仕草）プハーッと（笑）
ジュリア：「それよりも、何かあったのではないですか？」
アラン：「うん？…あ、あぁ…ちょっと、話をしてきたのさ。どうやら、一条家も一枚岩じゃねぇようだ…良心はあるらしい」
ジュリア：「その良心は、本人が自覚しているものとは限りませんが」
アラン：「だから…いいんじゃねぇか？」と言い、「一条家は、"賢者の石"の研究をしていたようだ」
ジュリア：「それは、生命の欠片ですか？」
アラン：「あぁ…で、その研究に彼女は関わっていた。…何かあるのかね？」
ジュリア：「私もまだ、そこまでは聞けませんでした」
アラン：「神様は秘密主義者、かね？」
ジュリア：「神は、全てを知り…全てを教えてくれます。ただ…私がまだ、それを聞く位置に立っていないだけです」
アラン：「俺には、神とかそういうもんはよくわからないが…だが、俺はあの子が幸せになってくれれば、それでいいと思っている」
ジュリア：「ええ、それが一番いいのでしょう」
アラン：「ふ、あんたはよくわからないところが、どこにでもあるが…こういうところは共感できるな」
ジュリア：「長年生きてきた私と言えど…姫を守る騎士に憧れるものですよ」
アラン：「そうだったな、あんたも英国のレディだった」
ジュリア：「えぇ」と言って、また虚空を見上げてですね、「レディというには、少々時が経ち過ぎましたが」
アラン：「だからといって、マダムと言うわけにもいかんだろう…レディ、ジュリア・クラーク」
ジュリア：それには、笑顔で答えます。

　今は、騎士などいなくともいい。
　いつかその時が来ればきっと、神の言葉が私にそれを教えてくれるだろうから。
　その時まで、私は待っていよう。

■降り止む、雨　Research 13

　奴の全てを認めたわけではない。
　どれだけ自分に言い聞かせたところで、奴の性根が気に食わないのは、変わらない事実だ。
　所詮、水と油。どこまで行っても平行線。
　だが、平行線なら平行線なりの、決着のつけ方もあるのではないか…そう思った。

弘助：そろそろ、小腹が空いてきたので一路、商店街を繰り出します。ミストと一緒に。
ＧＭ：了解。そうやって商店街を歩いていると、ポツ…ポツ…と雨が降り出してくる。そう、天気予報は…
弘助＆ＧＭ：晴れのはずだったのに！（笑）
ＧＭ：どんどん雨は激しさを増していく。夏特有のスコールとは違い、長い雨になりそうな雰囲気がある。
弘助：「おいおい…天気予報じゃ快晴だって言ってたぞ！……あそこの軒先で、雨宿りするぞ」
ＧＭ：なるほど、あそこの潰れている店の軒先ですね。"閉店しました、探さないで下さい"とか不吉な張り紙がされてますが（笑）
弘助：そこに駆け込みます。
ミスト（ＧＭ）：「当分、止みそうにありませんね…」
弘助：「まったく、傘の用意なんてしてねぇぞ…ちょっと買いに行って来るかな」
ＧＭ：と、考えていた矢先…そこに思いもよらぬ珍入者が、その軒先に入ってくる。その人も傘を持っていなかったんだろう、その軒先に駆け込んでくる。「よもや、雨が降ってくるとはな…あの天気予報士め」と、忌々しく呟きます（笑）
弘助：うん？
ＧＭ：見覚えが、ありまくりますよ？（笑）
弘助：銀髪かなぁ？（笑）
ＧＭ：銀髪だねぇ、ついでに紅い瞳だねぇ（笑）
弘助：「ええ、本当に参りま……！？」
ＧＭ：向こうも、恐らくは君達の事は覚えがあるだろう。しかし…ただ、数秒君達の方をチラ…と見た後、懐からキセルを取り出す。キセルを取り出した後、まだ何か別なのを探しているっぽい。
弘助：こっちはミストを庇うように立って、「グゥルルルル…」と狼の唸っています。
ＧＭ：「どこかに、落としたか」と、呟いた後…気だるそうにそっちを見て「なぁ…火、持ってないか？煙草が吸いたくてかなわん」
弘助：「…え？火、火…ですか？」と一応探し出す（笑）「生憎、煙草は吸わないんで…って、あんたも俺と歳同じくらいじゃねぇか！？」
吹雪（ＧＭ）：「ふむ、別に未成年が煙草を吸ってい

変なのが浮かんだ：いい演出を思いついた、と同義…か？
あぶねぇ、間違って～：出てきたら、不思議結界に巻き込まれること間違いなし。
未成年が煙草を吸っても～：絶対にダメです。

てもよかろ…そこまで入れ込んでるわけでもない」
弘助：「いや、それはどうかと思うぞ！？」
吹雪（ＧＭ）：「…節度を守れば、いいだけの話であろうに」
弘助：「あぁ～！…とにかく火かぁ…」
ＧＭ：まぁ、あなたがいくら探しても火なんてあるわけがなく、彼もそれを理解したのでしょう。「はぁ、使えん犬だな…そこらの飼い犬のほうが、よっぽど気が利くぞ。こういう真似をしたくないから、文明の利器に頼るというに…」といって、パチッと指を鳴らすと、キセルに火が点く。…魔法か何かを使ったと思いねぇ。
弘助：「最初っから持ってるんじゃねぇかっ！！」
吹雪（ＧＭ）：「妄りに魔法を使うのは、あまり好ましくないのでな」
弘助：「あー、なんだって…あんたがここにいるんだよ！あんた、敵だろ！」
ＧＭ：ふぅっと煙を吐き、「敵、か…まぁ、敵やもしれんな」
弘助：「ほ、ほら、敵じゃないか。それが、同じ軒先で雨宿りして…どういうつもりだよ！」
吹雪（ＧＭ）：「まあ落ち着け、犬。呉越同舟という言葉もあるくらいだ…たまには、そういうことが起こってもおかしくはあるまい？」（笑）
ジュリア：か、かっこいい（笑）
弘助：「わっけわかんねぇなぁ…ミストのことは、もうどうでもいいってことか？」
ＧＭ：「今のところは、の話だ…あぁ、そうだ」と言って、そちらに視線を向け「お前、その女をどうしたい？」
弘助：「え…どうしたいって…俺は、この子の側にいてやりたい。それだけだ」
ＧＭ：「…お前も薄々は気付いて…いや、既に気付いているか。その女は、大きな力の代価として、多くの者の因果を捻じ曲げ、結果…不幸にする。その女自身もな」と、その言葉にミストがビクッと反応します。
弘助：「だから、一緒にいるんだ！彼女が周りを不幸にするから、彼女が責任を感じて、結局誰も…彼女の周りには誰もいなくなっちまう！そんなの寂しすぎるだろ！だから一緒にいてあげるんだ！」
吹雪（ＧＭ）：「そう熱くなるな、事実を述べているまでだ。…私だけでなく、多くの者達がその女を狙っている。力、命、その女が持つ、ありとあらゆるものをだ。その女を守るということは、己の全てを捨てることになる」
弘助：「俺は…俺は、それでも俺は、守ってやりたい」
吹雪（ＧＭ）：「…その言葉、お前の力相応のものと、捉えてもよいのか？」
弘助：「俺は世界を守るために、故郷を捨てて出てきたんだ…だったら！女の子１人守れなくて、何がウィザードだ！」
ＧＭ：それを聞くとですね、彼はキセルをコンッと叩き、吸い終わった葉を出す。そのキセルを仕舞い込みながら、「つくずく、愚かな奴だ」
弘助：「愚かって、お前…！」とちょっと反論しかける。
吹雪（ＧＭ）：「その愚かさに免じて、今は見逃してやる…だが、事が重大になれば、見逃すわけにはいかんぞ」
弘助：「…安心しろよ、お前の出番なんて…もう二度と来ないようにしてやる！」
ＧＭ：それに対しては無言。雨はいつのまにか止み…それを知った彼は、その軒先から離れていく。離れていく途中、「それと、一つ忠告しておいてやる…あまり吠えるのは止せ、弱く見える」と言います（笑）
弘助：「なにぃっ！？グゥルルルルルルッ！！」と、言われたそばから吠える俺（笑）
ＧＭ：彼は、そのまま君達の方を振り向きもせず、去っていく。
弘助：「いちいち…ムカつくやつだな～っ！！」と声に出してしまう。
ミスト（ＧＭ）：「…怖いけど、いい人でしたね」
弘助：「どこがっ！？」
ミスト（ＧＭ）：「きっと、いい人ですよ、あの人。私、人を見るのだけは得意なんです」
弘助：「う、うーん…」頭を掻く。
ミスト（ＧＭ）：「それより雨、止みましたね」
弘助：「だな…それじゃあ、帰ろうか」
ＧＭ：彼女はコクリ、と頷きます。

２人も軒先から離れていく。
先ほどまでの雨が嘘のように晴れていた―

■急転　Research 14

ＧＭ：連続シーンになっちゃうけど、また弘助君のシーンにします。さっきの出来事から、大分経っていると思ってください。もう夜になったくらいですね。帰り道の途中、といったところでしょう。
弘助：買い物が終わった…肉とか、ミスト用の野菜とか…
アラン：こいつ、生で食う気だな（笑）
弘助：ビーフは生だ…豚は焼く。
アラン：なんだ、その拘りは（笑）
弘助：そうして、買い物をしたものを手に下げながら、テクテクと歩いている。
ミスト（ＧＭ）：「弘助さん…」
弘助：「うん？」
ミスト（ＧＭ）：「弘助さん達と出会って…その間に私、大分変われたんじゃないかって思うんです」
弘助：「うん」
ミスト（ＧＭ）：「昔の私は、ただ悲しむだけでした…こんな些細なことが楽しいとも思わずに、ただ泣いていました。」
弘助：それは、そういう寂しい時代を想像して…眉を顰める。
ミスト（ＧＭ）：「今では、こんな些細な、でも…とても楽しい事があるって、わかりました。だから、きっと大切な事も見つかるんじゃないかって、思うんです」

節度を守れば～：それ以前に未成年は煙草を吸ってはいけない。
呉越同舟：孫子の言葉。敵同士が同じ場所に居合わせている状態、または反目し合いながらも共通の利害や困難に関して協力し合う、という意味。

弘助：「うん、きっと求めれば…見つかるよ。なんだって―」
ミスト（ＧＭ）：「ええ、それが見つかったらとても素晴ら―」

視界が回る。
後頭部に何かが衝突、そして衝撃。
そのままブロック塀に叩きつけられ、頭だけでなく身体ごと埋まる―！
後頭部には、何者かの手。
それが、弘助の頭を握り潰しかねないほどの力で、締め上げる。

「やれやれ、探しましたよ？ミスト―」

夜の道に響く、自分の後ろにいる奴とは別の、知らない誰かの声。
「そろそろ…くだらない時間は、終わりにしましょうか」

弘助：「くだら、ない…だと…っ！？」何とか抜け出そうと抗う。
ＧＭ：だが、抗う力を遥かに超える力で、あなたを掴んでいる者が、押さえつける。さらに、あなたの頭部をギギギッとさらに締め上げる。
弘助：「ぐ、ぅう…っ！？」
ミスト（ＧＭ）：「いや、です…！あなたのところには、いきたくありません！」
ＧＭ：「はて、困りましたね…では、こうしましょう。あなたが来なければ、あの少年の頭が潰れてしまいますが…それでもよろしいですか？」と、同時にギリッと。ちょっとだけメキッと音がしたような気がする。
弘助：「だ…だ、めだ、ミストっ…この楽しい、時間を終わら、せ…ぐ、あぁっ」
ミスト（ＧＭ）：「わ、私は…っ」
？？？（ＧＭ）：「さて、どうしますか？…彼を傷つけたくは、ないのでしょう？」
弘助：「だ、ダメだミス…がぁっ」ミシッと（笑）
ＧＭ：うん（笑）君が何かを言おうとするたびに、締めつける力が強くなる。

「わかり…ました。わかりましたから…彼を、放して、ください」

搾り出すような声が、彼女の口から紡がれる。

「聞き分けの良い子は好きですよ、ミスト」

それを聞いた男―一条灯夜―は満足そうな笑みで、それに答える。

「では、行きましょうか」
「ダメだ！ミスト…行くなぁぁっ！？」

絶望的な、狼の咆哮が響く。

ＧＭ：その瞬間、後頭部を掴んでいた手が離れます。
弘助：「が――はぁ…っ！…ミストっ！」
灯夜（ＧＭ）：「ですがね、ミスト…私は障害となるものは徹底的に排除する主義なんですよ」

すぅっと…灯夜の手が弘助に向けられる。
その手に魔力が収束し、確実に弘助を殺すだけの威力を以って弘助を射貫く弾丸と化す――

「さようならです、名前も知らない少年…おそらくは、もう二度と会うことはないでしょう」
「き…さ、まぁっ！！！」
「私とも、彼女とも…ね」

放たれた魔力の弾丸が、弘助を射貫かんとする。

ジュリア：出てもいいのかな？
ＧＭ：むしろ、出ないと彼が死ぬ（笑）
ジュリア：わかりました。では、炸裂した魔力の弾丸…そこに、馬鹿でかい赤塗りの十字剣を持った少女が、立つ！（笑）そしてこう言う。「憧れは、憧れ…」と最初に言ったあと、「お困りのようですね、コウスケ。神の御加護は必要ですか？」
弘助：「じゅ、ジュリアさん！」
ＧＭ：だが、爆煙が散ったあと…目の前にいた者達は跡形もなく消えていた。
ジュリア：ほう。
弘助：「ミスト…？ミストっ！！」と叫ぶが、返事はない。「俺は、俺は…またっ…！」と、悔し涙がポロポロと零れ始める。
ジュリア：では、そこのハードボイルド（アラン）が出てくる前にですね（笑）「諦めるのは、まだはやいです。まだ、神の最後の言葉は…届いていない」
弘助：ジュリアのほうを見上げます。
ジュリア：…どーせ、全部アランに持っていかれるんだもん（笑）
アラン：今のうちにアドバンテージを稼ぐがいい（笑）
ジュリア：くそぅ（笑）「悔やむのは、全てが終わった後にしなさい。今、悔やむことに時間を割いていては、事態は取り返しがつかなくなりますよ」
弘助：「ジュリアさん…そう、ですね、でも…奴が、奴らがどこに行ったのか、わからない…！」
アラン：ここらへんで登場しようか。「いや、俺はあいつらのことを…よく知ってるぜ」
弘助：「アランさん？」
アラン：「さぁ…早く、お姫様を探しに行くぞ。白馬の王子」
弘助：「あぁ、わかった…」

弘助の全身の毛が、ザワリと逆立ち、弘助の身体に異変が始まる。
尻尾、爪、牙、全身のあらゆる個所が変質し、巨大な狼と化していく。

―狼の遠吠えが、夜の街に響き渡った。

どーせ、全部アランに～：ジュリアのプレイヤー、いじけ気味。

■けじめ　Research 15

３人が夜闇に包まれた道を駆ける。
だが、その途中―
彼らの目の前に、立ち塞がる人影が、いた。

アラン：人影っ！？
ジュリア：銀色の人かな？（笑）
ＧＭ：その表情は、殺意…というよりは、怒気に溢れている…ような気がする。そして彼は君達の方に、ツカツカツカ…と、歩み寄ってくる。
弘助：「彼女を取り戻しに行く…道を開けてくれ」

「―はぁ」

不意に、彼が溜め息をつく。
―と、即座に
弘助の顔面に、手の甲を叩きこんだ。

弘助：「ぐふっ…！」
ＧＭ：「ふん、あれだけ粋がっておいて…このザマか」と言って、さらにもう一撃を、加える。そして、「どうやら、私の見こみ違いだったようだ…やはり、彼女は殺しておくべきだった」と彼が言います。
弘助：「なん、だと…っ！」
吹雪（ＧＭ）「私がお前を過大評価しなければ、お前が彼女を守るだの言わなければ、彼女は苦しまずに済んだ…違うか！？」

その怒りは、誰に向けられたものか。

弘助：「それは…っ」
吹雪（ＧＭ）「何より、お前が甘かったせいで、彼女は苦しむことになった…お前を、守るためにな」
弘助：「…っ！」

それは、自分自身に向けられたもの。だが、認めたくない感情でもある。
その苛立ちを、目の前にいる者に―ただ浴びせている、だけ。
そうしなければ、気が済まなかった。

「そのへんで、弘助を離してもらえませんか…春日吹雪」

我関せずと、既に先を行っていたジュリアが振り向き、呟く。

「まだ、結果は出ていません。彼女が今苦しんでいようとも、それ以上の幸福がその先にあればいい」

それは神の言葉か、はてまた彼女自身の言葉か。

ジュリア：「そのためには、私とアランでは役不足です…彼女を助けるのは、白馬の王子でなければ」
吹雪（ＧＭ）：「ふん…こいつが白馬の王子？…は、たかが女１人も守れぬ男が？」

自分とて、守るべき者がいないわけではない。
そういう面においては、彼は弘助に共感を抱いて

いるつもりだった。だからこそ、苛立ってしまう。

「失望したぞ…貴様は、負け犬以下の駄犬だ！」

　－心の中の苛立ちを思いっきり吐き捨てた。
　らしくもない。自分にここまでさせるこいつは…やっぱりただの愚か者だ。

　ぎり、と。
　弘助の手が地面のコンクリートを抉る。
　握りつぶしたコンクリートの塊が、腐葉土となって弘助の手から零れ落ちる。

「…あの子は、俺が取り返してみせる！」

　弘助の周りから、コンクリートを割って大量の草が芽吹いてくる。

「それに、お前は殺すだのなんだの言うけど…」

　芽吹いた草が成長し、それらは徐々に木々へと変貌していく。

「どれが正解なのかはわからない…でも、あの子の怯えた顔を見て、寂しそうな顔を見て！黙っていられるかぁっ！！」

　成長した木々の蔦が弘助に絡みつき、それらが弘助を守るための鎧と化す。
　これが、弘助の一族が持つ力。大自然の加護。

　－呆れた。
　守れるだけの力もないくせに、よくもまぁそんなことが言える。
　だが…

ＧＭ：彼が懐からキセルを取り出し、それに火をつけて…「この、うつけ者が」と、何か毒気が抜けたような感じに言います。
弘助：「あんた…？」
吹雪（ＧＭ）：「手を貸してやらんことも無い。もとより、この土地の管理者は私だ…ここで起きたことを、私が収めるのは道理であろう？」
弘助：「いや…あんたは、最後の最後まで、手をださないでくれ。俺が死んだその時に…」
ジュリア：「何を言っているのです、弘助？白馬の王子も騎士も、姫を守るために身を呈すことは許されますが、それで死ぬことは許されませんよ？やるのであれば、最初から全力で…使えるものは全て使うべきです」といった後、「それに、道案内がアランだけでは心配です」と言います（笑）
アラン：苦笑して「…おいおい」（笑）
弘助：「！…そうだ、意地を張って取り返しのつかないことになったら、それこそ…すまん！さっきの言葉は忘れてくれ！！たのむ…っ！」腰を９０度くらいにまで折って、頭を下げます。
吹雪（ＧＭ）：「頭を上げい、誇り高き彼の眷属の末裔よ。不肖、この春日家当主…春日吹雪、せもてもの露払いくらいには、なるであろ」
弘助：「すまない…いや、ありがとう、ございます…っ」
ＧＭ：「犬に、礼を言われる筋は無い」と言って、キセルから吸い終わった葉を出し、キセルをしまう。「では、行くとするか」
弘助：では、それと同時に駆け出しましょう。
アラン：「吹雪…あんたも演技達者だな」
吹雪（ＧＭ）：「これくらいできなくては…世渡りなど、できんよ」
アラン：「そうかい。それにしても、あんたはやさしいな」
吹雪（ＧＭ）：「私が、やさしい…か」
アラン：「あぁ、とことんな」

「さあ、行こうぜ。はやくしないと、姫様も危ない」

　行くべき場所は、既にわかっている。
　そこに灯夜が、“鴉”が、そして…ミストがいる。
　夜の闇に包まれた道を、四人は駆け抜けた。

■暗き闇の中で　Research 16

　そこは、無機質な天上、床、機材で埋め尽くされている実験場。
　その中央。機材にケーブルで繋がれた台座に拘束されているミストの姿があった。
　彼女の意識は既に無く、それをただ眺めている灯夜の姿もまた、そこにあった。
　そして、その側に控える“鴉”…

「私も衰えたものです。このような大掛かりな機材に頼らなければ、この大規模な術式を扱えぬとは…」

　灯夜の声が、広い実験場の床や天上に反響して響く。それを、“鴉”はただ無表情に聞いているのみ。

「ですが、それも今日で終わりです。“賢者の石”を手にした暁には…まず、彼の一族への復讐を行うとしましょう。あぁ、そうだ…あの当主を真っ先に始末するとしましょうか」

　くくっ、と灯夜が唇を歪めて笑う。
　“鴉”は、それでも無表情のまま。

　しばらくの沈黙の後、“鴉”が灯夜の側を離れる。
　なぜだろうか？
　無表情であるはずの彼の顔に、何らかの思惑があるかのように見えるのは。

「さあ、はじめましょう…世界が、変わる日だ」

　灯夜が魔導書を広げる。
　部屋一面に広がった術式の紋様が、光り出した－

道案内が～：ひどい言い様である。
あんたはやさしいな：ホントはやさしい子…のはずです。多分。

◆　収束　～クライマックスシーン～　◆

■群れ為す顎　Climax 01

－緋山市郊外。
既に廃病院と化したその地下に、灯夜の実験場がある。似つかわしいと言えば、似つかわしい場所ではある、と感じた。

GM：というわけで、君たちはその病院の前までたどり着いた。“月厘（げっこう）”が展開されているらしく、空には紅き月が昇っている。
アラン：「ここだ…」
弘助：「“月厘”が既に展開されているのか…？」
アラン：「急がないと、やばいな」
ジュリア：「ええ、ですが…ここまで来たならば、後一息です」
弘助：「目標はすぐ近く…突破する！」と言って、駆けて行きます。
GM：その病院の玄関から入ってすぐのロビー…そこに入った瞬間、無数の殺意が君たちに対して向けられているのがわかる。
アラン：「流石は一条家の牙城…尋常じゃねぇ数の敵がいやがる」
GM：薄暗くてよく視認できないが、暗視ゴーグルをつけ、銃を構えた兵士達がいる。数は…いや、数えたくも、無い。
アラン：ほう。
ジュリア：「この程度の障害ならば、大したことはありませんが…量が多いですね」
アラン：「消耗戦になるのはきついな…」
弘助：「それでも、行かなきゃいけない」ギリッと、拳を握り締めます。
吹雪（GM）：「まて、ここでお前達が消耗するわけにはいくまい」
アラン：「またしても…いいのか？」
吹雪（GM）：「露払いくらいにはなる、と言ったであろう？お前達ははやく、その地下の実験場とやらに行け」
アラン：「あぁ、わかった。頼んだぜ」
GM：「道は私が開けてやる！」と言って彼が指をパチンッと鳴らします。その瞬間、《ファイヤーボール》が発動し、兵士達の一部を完膚なきまでに吹き飛ばす！
アラン：「行くぞ！」
弘助：「はいっ！」

「く、侵入者を…！！」

言いかけた瞬間、その兵士の胴が袈裟懸けに切り裂かれる。
その傍らには、和装に身を包んだ吹雪の姿。
その手には、既に抜刀された抜き身の刀。

「さて、下郎ども…お前達の相手は、この私だ」

ざわ…と、兵士達が一瞬どよめくが、すぐに通常の判断力を取り戻し、吹雪に銃口を向ける。

「く…相手の得物はたかが刀…！？」

言いかけた瞬間、それを見た兵士達が凍りつき、再び判断力が停止する。

「どうした、“たかが刀”なんだろう？」

そう呟く吹雪の周囲には、無数の刀が宙を浮いており、彼の月衣（かぐや）からも、次々と刀が現れる。
その全てが妖刀の類であり、全て彼の従える“魔物”。銘は“顎（あぎと）”という。

「今日はいささか、気分が悪いのでな…手加減は一切するつもりは無い」

吹雪が、兵士達を見回して呟く。

「では、存分に喰らい尽くせ、“顎”…！」

－後ろから聞こえてくる、怒号、悲鳴、銃声。
今、ロビーで何が起こっているのか、弘助達には大体想像がついていた。

「…彼の者たちに、祝福を」
「ふう、あいつらも運が無かったな」

あの時、吹雪（あいつ）と本気で殺り合わなくてよかったと、アランは心の底から思った。

■“鴉”　Climax 02

「待ってろ…今度こそ！」

鉄製の扉を蹴破る。
そこには、夥しい数の術式に満たされた広大な実験場が広がっていた。

ＧＭ：そして、君達は実験場にたどり着く。ここに至るまで、ほとんど妨害はなかった。ロビーので充分だと思ってたんだろうね。…床や天上、壁には術式が走り、機材が唸りをあげている。
アラン：ふむ。
ＧＭ：その中央…灯夜と、無数の機材に繋がれたミストの姿が。
弘助：「いますぐミストを…そこからはなせっ！」

ファイヤーボール：火属性の攻撃魔法。
広範囲への攻撃が可能な上に、威力も半端無く高い魔法。
吹雪の魔物：刀の形をしているが意思を持つ妖刀であり、無数に存在するが実際には一体の魔物である。

と、その瞬間足元から蔦が生えて、ミスとのほうへと伸びていく！
GM：それは、灯夜達の一歩手前で結界に弾かれる。
「おや、実に早いですね。もうあの兵士達を倒してきましたか…あれでも、手練の者を集めたつもりでしたが」
アラン：「いや、ちょっと味方が増えてな」
灯夜（ＧＭ）：「なるほど、そういうことですか…その味方というのは、彼の一族の当主。そうですね？」
アラン：「ご明察」
灯夜（ＧＭ）：「それは丁度よかった。彼には少々用件がありましてね…まぁ、それは後に取っておきましょう…それに、術式は既に６割方完成しています。誰にも止めることはできません…」

　上下左右を走る無数の術式が、さらなる光を放ち始める。
　確かに、灯夜の言う通り…このままでは術式そのものを止めることは不可能だ。

ＧＭ：「ですが、あなた達にこのままここに居られては、邪魔なだけです。…“鴉”」と、灯夜が言った瞬間、彼の側に“鴉”がスッと現れる。
アラン：「“鴉”っ！お前…」

　その怒気を孕んだアランの声に、“鴉”は無表情に視線を向ける。
　いや…その視線には、何かが込められている。アランはそれを、感じ取った。

アラン：「…こっちに、来ないのか？」
“鴉”（ＧＭ）：「私は、どう足掻いても…そちらには行けません」
アラン：「また、酒を飲みたかったんだけどね」
“鴉”（ＧＭ）：「ええ、それは私も残念に思います。私も、もう少し酒の味というものを知りたかった…」
アラン：「じゃあ、今回はめぐり合わせが悪かったのかな…？」
“鴉”（ＧＭ）：「めぐり合わせ…あなたがそう言うのならば、そうなのでしょう。あなたがそう認識しているのならば」
アラン：「…お前も同じものを、見ようぜ？」
“鴉”（ＧＭ）：「いえ、私にはもう、それを見ることはできない。なぜなら…」

「私には、ここでやるべきことがあるからです」

　不意に、“鴉”が機材に腕を突き立てる。

「私のやるべきことは、ただ…これだけです」

　機材が過負荷によってオーバーロードを引き起こし始め、術式が次々に崩壊を始めていく。
　“鴉”が、術式に過負荷をかけ、破壊するために自身のプラーナを流し込んでいるのだ。

「やめろ“鴉”っ！そんなことしたら、お前は…！」

　“鴉”はそれには答えない。否、答えられない。
　自身のプラーナを削りとることが、どれだけの苦痛なのか、それは彼自身にしかわからないだろう。

　－所詮、この命は偽り。造られた物。
　その命を本物にしてくれた彼女のために。
　理解し難い感情を自分に与えてくれた彼女のために。
　この命を使いたいと、はじめて…

“思った”

弘助：なにぃっ！？（笑）
アラン：「やめろ“鴉”！お前はもうこっち側だ！」
ＧＭ：…人造人間の特殊能力《自爆》の使用を宣言します。

　唐突に、爆光と爆音が実験場に拡がる。
　しばらくの後、それらが収まった後に…
　かつん、と。
　“鴉”のかけていたサングラスが床に落ちた。

ＧＭ：それによって、灯夜とミストを守っていた魔力壁も解除される。
ジュリア：「“Mr. Black”…あなたとは短い付き合いでしたが、あなたの死は無駄にはしません」と言って、結界のなくなったそこを悠々と歩いていく。
弘助：「あの人…ミストのために…」
アラン：“鴉”のいたほうに歩いていきます。
ＧＭ：「“参式”め、妙な行動をとっていたのは、そういうことか」と言って、灯夜はミストのほうをチラリと見やる。「ミストの持つ因果律変動の力、それが偽りの命に真の命を与えた…ふふっ、実に興味深い。“賢者の石”を作れればそれでよしと思っていましたが、別の興味が出てきましたよ」と、彼は実験を阻まれたにも関わらず、非常に嬉しそうだ。
ジュリア：「興味を持っていただけたのなら、彼女を離して遠くから見守ることに徹してはいただけませんか？それならば、彼女も、彼女の騎士も、邪魔はしないでしょう」
ＧＭ：「彼女に興味が出てきた、というのは私の本心ですよ。ですが…その本心以上に私の中の確執が、それを許さないんですよ」と、暗い笑みを浮かべる。
アラン：「灯夜、よくそんなふうに笑ってられるな…自分の部下が死んだんじゃないのか？」
灯夜（ＧＭ）：「ふ…自分の部下、ね。あれが私の部下に見えましたか？」
アラン：「あいつは、あいつなりに、あんたのことを心配してたんだろうよ」
灯夜（ＧＭ）：「それも、届かねば意味が無い」
アラン：「そうか…あんた、本当に腐ってるな」
灯夜（ＧＭ）：「腐っている…なるほど、確かにそうかもしれません。長年に渡り溜まった、この心の中の

自爆：人造人間の特殊能力。命と引き換えに対象に大ダメージを与える、最後の切り札。
“参式”：あの“鴉”は、３番目らしい。
因果律変動：“大いなる者”の力は強大だが、自身だけでなく周囲にまで何らかのよからぬ影響を与える可能性がある。ミストもまたそうであった。

泥が、私の心を腐敗させきっている。だからこそ！このようなことが行えるのですよ！そして、私はそれをとても喜ばしく思っている！！」
アラン：「そうかい…じゃあ、“ 鴉 ”と共にお前を倒してやるよ」と言って、“ 鴉 ”のサングラスをかける。
ジュリア：く、くそ…かっこいい（笑）「あなたにはMr．Blackの声も、私達の声も届かないのでしょう。あなたの曇った心に、神の言葉が届かぬように」
灯夜（ＧＭ）：「神の声…それが聞こえぬ者が、まだこの世界にはまだ大勢いる。それらの者達もまた、私と同じように心に泥を抱えているのです。なれば、誰かこのような行為に及ぶことは、大いにあり得る事なのですよ、この世界では」
ジュリア：「ええ、貴方の行動はあり得る事です。ですが、それが神によって…いえ、人によって許されるものとは、限りません」
灯夜（ＧＭ）：「人の心など、とうの昔に捨てましたよ。私はもう、悪魔に魂を売り渡しました」
弘助：「だったら、なおさらあんたを生かしておくわけにはいかない…あの人だって、あんたがこんなことをするのを、望んじゃいなかったはずだ！」
灯夜（ＧＭ）：「あの程度の機械人形に、無駄な思い入れを…仕方ありませんね、不完全ではありますが、“ 賢者の石 ”の力、ここで使わせていただきますよ」

灯夜の手の中に、赤い宝石が握られていた。
彼はその宝石を魔導書にはめ込む。

灯夜（ＧＭ）：「不完全とはいえ、大いなる者（グレートワン）の力を備えた、この“ 賢者の石 ”の力…あなた達に太刀打ちできるとでも？」
弘助：「ゴチャゴチャとうるせぇ！あの人を人形だの！ミストのことを興味深いだの！ゴチャゴチャと難しい理屈ばかり言いやがって！理屈じゃ解決できないことがたくさんあるって、あんたにはわからないのか！」
ＧＭ：彼は君のその言葉をただ聞き流す。そして、「それにしても…“ 賢者の石 ”の力があるとはいえ、３対１では少々アンフェアですね…“ 鴉 ”」

彼の言葉と共に、部屋の隅…闇となっている場所から２人の“ 鴉 ”が、闇から溶け出すように現れた。
その姿は、先ほどの“ 鴉 ”とどこからどこまでも同じ。ただ違うのは、彼らにはあの“ 鴉 ”ほどの意思が感じ取れないことだ。

アラン：「そうかい、スペアは何体でもいるってことか…だが、さっき行っちまった“ 鴉 ”は、たった１人だったんだよ」
灯夜（ＧＭ）：「何をわけのわからないことを…そろそろ、はじめましょうか。私にも、時間は余り残されていないのでね」

２人の“ 鴉 ”が、それぞれの武器を構え、灯夜を守るように弘助たちの前に立ちはだかる。
その後ろで、“ 賢者の石 ”の力を得た魔導書を片手に、灯夜が魔術の詠唱に入る。

－決戦の火蓋が、切って落とされた。

悪魔に魂を～：エミュレイターと協力している、ということ。おそらく、賢者の石を作るためだろう。
２人の“ 鴉 ”：壱式と弐式。外見上は同じだが、壱式は接近戦闘型、弐式は射撃戦闘型という設定。ちなみに参式は潜入型であった。

■決戦　Climax 03

ーかくて、戦いは始まった。

行動判定の結果、第１ラウンドにおける行動カウントは、以下のようになった。

“鴉”Ｂ……２１
アラン……１７
灯夜……１６
“鴉”Ａ……１４
ジュリア……１３
弘助……１３

注意すべきは、“鴉”Ｂが２回行動可能（行動カウントが２０以上）だという点にある。火力が高いだけに、危険度は大だ。

ＧＭ：意外といい目出しちゃった（笑）それじゃあ、“鴉”Ｂから行動開始ですね。こっちのは巨大なライフルを構えています。それを、アランに向けて撃つ！命中判定いくよー。“アンチマテリアルライフル”だから気をつけろー。
アラン：ＯＫ。
ＧＭ：ここで強化人間の特殊能力《クィック・ターゲッティング》を使用。命中判定に＋５の修正を加えた上で達成値出します…２５。
アラン：２５？やっべー…２４（笑）
ＧＭ：ダメージ出しておくね…３６点！
アラン：１４点軽減して…２２点か。ダメかもしれんよ？（笑）
ＧＭ：反動をものともせず、アンチマテリアルライフルを片手で、ガンッと撃ち、その砲弾がアランに命中する！
アラン：それを受けて、「く、なかなか、やるじゃねぇか…」次は俺の番だな。「“鴉”、俺に力を貸してくれ！」《隠し武器》を発動。ホルスターから7０ｃｍ超のライフルを抜き放ち、「くらえ！」と言って引き金を引く。クリティカルが発生してるので《サトリ》と《死点撃ち》が発動。絶対命中の上、防御力を０にして判定してくれ。ダメージは、２９点。
ＧＭ：２９点…結構痛いな。流石《死点撃ち》だ。辛うじて直撃は避けたが、サングラスがパキンっと割れる。

続く、灯夜の行動は呪文詠唱で２カウントが消費し、“鴉”Ａに対して《ライフドライブ》を発動。これによって、“鴉”Ａは３ラウンドの間、ＨＰが回復し続けることになる。
それに続いて、“鴉”Ａは通常移動でジュリアのいるｓｑに侵入した。

ジュリア：アラン、君の射程はいくつ？
アラン：５ｓｑだ。
ジュリア：了解。次のラウンドでもうちょっとこっち寄って…（魔法が）届かない（笑）
アラン：了解。
ジュリア：弘助の前に行動しましょう。接敵してきた“Mr. Black”に攻撃。十字剣をですね、軽く、だがしかし、剣の重量を思いっきり乗せた斬撃を繰り出します！
GM：了解。来なさーい。
ジュリア：得に使うものも無い。とりゃ…２１。
GM：…２２（笑）
ジュリア：なにぃっ！？（笑）
GM：その攻撃を予測していたかのように、“鴉”はスッと横にステップして避ける。そして、床が思いっきり砕けます。
弘助：こっちの番だな。「お前だけはーっ！！」と言いながら通常移動して終了。
GM：では、“鴉”Ｂの再行動。ターゲットを弘助に移します。《クィックターゲッティング》を使用して、攻撃を行います。
弘助：了解です。
GM：んー…２７っす。
弘助：対抗タイミングで《獣化》を発動！姿が完全に人狼のそれと変貌していく。そして、超対抗タイミングで《アーマーフォーム》も発動。…だが、出目は悪い（笑）２０だ。
GM：命中だね。ダメージはっと…３３点。
弘助：…ファンブルっ！？《幸運の宝石》を使用します。振り直し…３０っ！
GM：硬っ！？（笑）
弘助：３点ダメージを受ける。「そんなものが、通用するかぁっ！」
GM：思いっきり衝撃は来るがしかし、その砲弾は君の肉体を大きく傷つけるには至らない！

ー第２ラウンド。
ジュリアがプラーナを使って２回行動を試みるも、２回行動には至らず。またも敵に先制される。

ＧＭ：“鴉”Ｂのほうが《ヴォイド･アタック》を使用。当然《クィック・ターゲッティング》も合わせてプレゼントだ。
アラン：《白面》を使用。ターゲットから外れる。
ＧＭ：でも《白面》ってターゲットにならないだけなんだよね…ターゲット強制変更、弘助にする。
アラン：障害物の陰へと移動しつつ、「じゃあな…」と言って闇の中へと消えていく。
ＧＭ：自らの知覚能力では追い切れないと判断したのか、“鴉”はその銃口を弘助のほうに向ける！
弘助：わぁい（笑）
ＧＭ：たいしたことはない…命中判定、２３。
弘助：プラーナ５点解放する！あ…いや、面倒だから６点にする。ってファンブルしましたっ！（笑）
ＧＭ：ＯＫ（笑）《ヴォイド･アタック》の効果で３７点の魔法ダメージが飛ぶぞ。
弘助：【抗魔力】で判定だよね。…プラーナを５点消費する。
ＧＭ：うん。狙ってやってる（笑）

行動カウント：ラウンド開始前に行う行動値判定によって決定される行動の優先順。“鴉”ＡとＢ：Ａが壱式、Ｂが弐式。
２回行動の条件：行動はカウントを２０消費して行う。つまり２１を出せばカウントが１残るので、１カウント時に再行動が可能。
アンチマテリアルライフル：対物ライフル。銃というよりは既に砲に近い。射程が１００ｓｑという鬼のような武器である。
クィック・ターゲッティング：強化人間の特殊能力。命中判定の達成値が上昇する。

隠し武器：忍者の特殊能力。
戦闘時に一番最初に行う攻撃の命中判定をクリティカルにする。
サトリ：魔剣使いの特殊能力。
命中判定がクリティカルの場合、攻撃を絶対命中にする。
死点撃ち：汎用系特殊能力。
命中判定がクリティカルの場合、対象の防御力を０にする。
ライフドライブ：水属性魔法。効果時間中、ラウンド終了時にＨＰが回復し続ける。

弘助：２２点は防げた…それでも１５点ダメージか。肩あたりに命中して吹っ飛ばされる！「グゥルルルル…」と牙剥き出しにする。
ＧＭ：次、“鴉”Ａの行動。ターゲットは、同一ｓｑにいるジュリア。
ジュリア：当然ですね。
ＧＭ：判定…あ、ゴメン、クリティカル。《サトリ》で絶対命中、《死点撃ち》で防御力を０にします！
アラン：俺と同じコンボだっ！
ＧＭ：ダメージ出しますよぉ…殺しかねないな、４５点。
ジュリア：《フォースシールド》で防御力を８点上昇、さらにプラーナ７点解放で防御力を１７まで上昇…その上で２４点軽減。２１点ダメージかぁ…痛いなぁ。

灯夜、それに続くジュリアが行動カウントを１まで遅らせる。
その次の弘助が“鴉”Ｂの同一ｓｑに侵入する。アンチマテリアルライフルは同一ｓｑに攻撃できない、と踏んだ上での侵入だ。
だが、これが後に波及を呼ぶことになる。
結局、この攻撃は“鴉”Ｂが《幻想舞踏》を防御判定で発動させ、ダメージは通らなかった。

気配を殺し、情勢を伺う。戦い方の基本だ。
弘助のように強力な力があるわけでもなく、ジュリアのように魔法を使いこなせるわけでもない。
そんな自分にできることは、徹底的に基本に忠実に…相手の隙を見て、一撃に全てを賭けるしかないのだ。
そして、相手が弘助に釘づけになっている今、勝機は今しかない。

アラン：「俺が逃げるとでも、思っていたのか！？」“鴉”Ｂに攻撃をしかけます。
ジュリア：忘れないで、移動を（笑）
アラン：……
ジュリア：死にたければ放っておくけど（笑）
アラン：…隣のｓｑに戦闘移動します（笑）その上で《幻想舞踏》を使用！命中判定がクリティカルになったので《サトリ》と《死点撃ち》が発動！
ＧＭ：きなさーい（笑）
アラン：ダメージは…出目、低いなぁ。２７点。
ＧＭ：ここは一発《幻想舞踏》を使用する。く…割と削れているとは言っておこう。
アラン：そうか、了解。

２回行動となっていた“鴉”Ａはジュリアに攻撃をしかけ、命中判定でクリティカルが発生。再び《サトリ》と《死点撃ち》が発動する。

ジュリア：く、普通に死亡までいくよそれは（笑）《不老不死》を使用！生死判定をクリティカルにします…これで帰れなかったら笑い者だ…だ、大丈夫、流石に失敗しない（笑）
弘助：「ジュリアさんっ！！」

－銀色の閃きが、一瞬にしてジュリアの胴を薙ぐ。それは必殺と言っても過言ではなく、一部の狂いもない完璧な一撃だった。
血飛沫が、周囲に舞い散る。

ＧＭ：弘助、油断したな。この“鴉”Ｂは強化人間の特殊能力《ガン・フー》を持っている。故に、同一ｓｑ内に攻撃できないはずのアンチマテリアルライフルでも、弘助を攻撃できる！
弘助：うっ…
ＧＭ：攻撃、弘助に行きます。《クィック･ターゲッティング》を使用して…命中判定、２１！

至近距離ではアンチマテリアルライフルは使えない、と弘助が油断していた時だった。
“鴉”は絶妙なステップワークで、一定の間合いを取り続ける。
そう、そしてその間合いは、アンチマテリアルライフルの銃身より若干広い程度の間合いだった。

弘助：プラーナを２点使用する。……。
ジュリア：ピンゾロ（笑）
ＧＭ：３７点のダメージをたたき出してあげよう。
弘助：プラーナ、９点解放。防御判定３３点！

一瞬の隙を突いて、“鴉”がアンチマテリアルライフルの引き金を引く。
それとほぼ同時に発射された砲弾が、弘助の胸板に直撃。弘助の身を守っていた草木の鎧を砕いた。

アラン：「弘助っ！！」
弘助：「こ、こいつ…！！」

－第３ラウンド。

灯夜が行動カウント２５に躍り出るも、“鴉”２体は一気に失速。さらにアランが行動カウント２３を叩き出し、弘助達が除々に優勢になっていく。

ＧＭ：特殊能力《符術》によって、必要な詠唱カウントは０になっている。灯夜が水属性魔法《アクレイル》を発動、対象は弘助だ！達成値は…２８！
弘助：クリティカルじゃないと…ファンブルした（笑）
ＧＭ：殺すかな…ダメージ、３５。
弘助：ぐはっ！？…２１点軽減。１４点ダメージか…ＨＰマイナス７！

「まずは、目障りなあなたから消えてもらいましょう…」

灯夜の手から、魔力を帯びた水の弾丸が、放たれる。そして、それが必殺の威力を以って弘助を撃ち貫く！

「が…はっ！？」

獣化：人狼の特殊能力。自身の姿を獣のそれと変え、能力を上昇させる。
アーマー･フォーム：魔物使いの特殊能力。魔物が鎧となって防御力を上昇させる。
幸運の宝石：１回だけファンブルを無効化するアイテム。
ヴォイド・アタック：汎用系特殊能力。物理ダメージを魔法ダメージに変換する。
フォースシールド：天属性魔法。魔力の障壁で防御力を上昇させる。
幻想舞踏：強化人間の特殊能力。判定を３回までクリティカルにする能力。
不老不死：吸血鬼の特殊能力。吸血鬼は簡単に死なない。生死判定の達成値を上昇する。

ガン･フー：強化人間の特殊能力。攻撃不可な至近距離でも攻撃できる。
プラーナ：生命の力。ウィザードは非常に高いプラーナを持っている。
ゲーム中では消費することによって判定に修正を加えたり、ＨＰやＭＰを回復できたりする。
符術：陰陽師の特殊能力。呪札を使うことにより、魔法の詠唱時間を短縮する。
アクレイル：水属性魔法。魔力を帯びた水の弾丸を放つ攻撃魔法。

弘助：生死判定～。
ジュリア：１５＋現在のＨＰの絶対値だから、２２だね。がんば（笑）
弘助：《死活の石》を使う…達成値に＋４されて…ダイス目が６、達成値２２！ぴったりだ！
ＧＭ：ＨＰが１まで回復。重傷値やね。
弘助：重傷値になった瞬間、《真なる獣》が発動！ＨＰが重傷値＋１まで回復します。

　どさり、と。
　弘助の体が、地に伏す。

「やれやれ、この程度ですか…まったくもって、あっけない」

　血の染まっていく、視界。

「いや、私が圧倒的すぎるのかもしれませんね？」

　何を言っているのか、わからない。
　誰が、いるのか、も。

　視界の隅に、映る少女。
　－あれ、誰だっけ…？
　あれは、誰だろう…？確かあれは、あれは、大事な…

　ゆらりと、弘助が立ち上がる。
　既に身体は満身創痍、のはずだった。
　だが何故だ、何故…今までよりも強き力を放っているのだろうか？

「ばかな、この私が気圧されている？“賢者の石”の力を得ているはずの、この私がっ！？」

　忌々しげに、灯夜が叫んだ。

アラン：「やったな、弘助…俺は、全力でお前を支援してやるよ」

　続くアランの攻撃は、“鴉”Ｂに対して《幻想舞踏》を使用し、《サトリ》《死点撃ち》のコンボを叩き込む。
　対する“鴉”Ｂも《幻想舞踏》を防御判定で使用するも…

　－アランの放った、一発の弾丸。
　それが、吸い込まれるように“鴉”の額へと一直線に飛び…
　“鴉”の眉間を、撃ち抜いていった。
　血と脳漿、そして機械部品を撒き散らしながら、“鴉”は倒れ伏す。

アラン：「“鴉”…何度も壊すことになっちまったが、すぐに楽にしてやるからな…」もう１人の“鴉”に向き直る。
ジュリア：次、私か…プラーナを使用してＨＰの回復を試みます。うあ、クリティカル…もう一回振って、２１点回復しました！（笑）
GM：うおうっ！？（笑）

「ふ、ふふふっ…こんなに痛いのは、久しぶりですよ、“Mr. Black”」

　倒れ伏したはずの、ジュリアの声が響く。

「ようやくお目覚めかい、レディ？」

　こうなることが、さも当然かのように知っていたアランが、ジュリアに言葉を投げかける。
　そう、彼女は不死者。
　生きることも、死ぬことも許されない永生者なのだ。
　あの程度で彼女が死を迎えることは、あり得ない。

ＧＭ：“鴉”Ａの攻撃をジュリアに…ファンブルっ！（笑）
ジュリア：マジで！？ＧＭ空気読みすぎ（笑）
ＧＭ：達成値は５だけど、一応避けてみて。
ジュリア：了解…あ、クリティカル（笑）
ＧＭ：ええええ！？（笑）

　起き上がったジュリアを再認識した“鴉”が、今度こそは、と言わんばかりに一閃を振るう。
　だが、斬ったと思ったその瞬間…
　彼女の姿が掻き消えた。

弘助：血だらけの身体で、灯夜のほうへ向き直る。
灯夜（ＧＭ）：「いやぁ、まったくもって忌々しい…忌々しすぎて、逆に嬉しいくらいですよ！あぁ、そういえば名前を聞いていませんでしたねぇ？」
弘助：唸り声で返す。戦闘移動で灯夜に接敵！命中判定、２２点！
ＧＭ：クラス的に避けられない…１９か。ちっ（笑）
弘助：《真なる獣》の効果で攻撃力上昇、４５点！
ＧＭ：対抗タイミングで《アース･シールド》を発動。その上で、防御判定…よし、４０点軽減！
ジュリア：硬っ！？（笑）
ＧＭ：《アース･シールド》の防御性能は高いからねぇ。…弘助の攻撃は、灯夜の前に展開された魔力の障壁によって、減衰されたものの、灯夜に一撃が与えられる！「“賢者の石”の力を乗せた上で展開された、この魔力障壁を破るとは…ふはははは！まったくもって、貴方は忌々しい！」と灯夜が言います。
アラン：“鴉”Ａに攻撃しよう。「さて、デュエットと行こうか？」と言いながら、引き金を引く。命中判定を《幻想舞踏》でクリティカルに。《サトリ》と《死点撃ち》が発動する。…ダメージにプラーナを６点上乗せして、３４点ダメージ。
ＧＭ：ぐ、クリティカルはしたが、《死点撃ち》で防御力０になっているから、弾ききれない…威力を殺しきれずに、“鴉”は吹き飛ばされる！
アラン：「は、神殺しの銃を…なめるんじゃねぇ」

死活の石：生死判定の達成値を上昇させるアイテム。
真なる獣：人狼の特殊能力。獣としての真の力を解放する能力。
　　重傷状態になると発動し、命中値と攻撃力を上昇させる。
機械部品を～：“鴉”は造られた存在…人間ではない。
アースシールド：地属性魔法。防御力を上昇させる魔法。能力が高い者が使えば、先述のフォースシールドを超える性能を発揮する。

その頃、病院のロビーは静寂に包まれていた。
ロビーの床には、夥しい数の倒れ伏した兵士達。
全て、死体か、あるいは立ち上がるだけの力も残っていないようだ。
この状況の原因となった少年は…今、カウンターに寄りかかって悠著に煙草を吸っている最中だった。

あれから、事は数分で片付いた。
弘助達を追いかけようとも考えたが、決着は彼らの手だけでつけるべきだろう…そう思って、ここで待っていることにした。

－不意に、四方から発せられる殺気に気付く。
ロビーの四隅、暗い闇の中から…四人の“鴉”が闇から溶け出すように現れ、吹雪を半包囲する形に取り囲む。

「…事が終わるまで、ここで一服してようと思っていたのだがな」

キセルから葉を取り出し、それをしまい込む。
キセルを刀に持ち替え、彼は抜刀の構えをとった。

「今度は、少々骨が折れそうだ」

向こうに行ってたほうが、面倒にならずに済んだか…。少しばかり後悔する。

誰も預かり知らぬ所で、新たな戦いがはじまった。

先ほどまでの攻勢から打って変って、弘助達の風向きが若干悪くなってくる。
アランの《幻想舞踏》の使用回数も底を尽き、思うように攻撃が命中しなくなってきた。

ＧＭ：灯夜の行動いきます。《アクレイル》を弘助に。…クリティカル！命中判定、４５点。
弘助：避けられないっ
ＧＭ：ダメージは、３０点ぴったりの魔法ダメージ。

魔力を帯びた水の弾丸が、再び弘助の身体を貫く。
その一撃は、満身創痍な状態の弘助にとって、致命的な一撃となった。

アラン：「弘助ぇっ！！」
弘助：生死判定…プラーナの最大内包値を１点減らして…成功～。だが、そのまま倒れるっ！
ジュリア：とっとと、“鴉”Ａを倒さないとキツイね。“鴉”Ａに攻撃…うわ、出目低っ！命中、１８点。当たらない気が…
ＧＭ：先生、世の中にはファンブルって言葉がありましてね…（苦笑）
ジュリア：マジですかっ！？（笑）ダメージ出しますっ…！クリティカルっ…ダメージ４５点。
ＧＭ：ぐ、２６点軽減して…あと一撃でやれれかねんな、このダメージは。
アラン：「今だっ！」プラーナを６点、命中判定につぎ込んで…命中判定、２８点！。
ＧＭ：んなの、避けられねぇっ！！（笑）
アラン：プラーナ５点使用してぇ…クリティカルきたー！！（笑）ダメージは４４点！
ＧＭ：……（無言で“鴉“Ａの駒を倒す）
アラン：よしっ！（笑）

ジュリアの重い一撃が、“鴉”を薙いでいく。
その一撃に、辛うじて耐える“鴉”。
だが、それによって生じた、その隙をアランが見逃すはずが無い…！
放たれた弾丸が、“鴉”の心臓部を撃ち抜いていった。

この次のラウンド、灯夜が行動判定でファンブルを引き起こし、行動カウントが０以下に…つまり、行動不能となった。

アラン：「あとは…お前だけだな」
灯夜（ＧＭ）：「ふ、所詮“鴉”は前哨にしか過ぎませんよ？」
アラン：「それでも、お前だけは倒さねぇと…気がすまねぇ」灯夜に攻撃を。
ＧＭ：…ルール的なこと言うとさ、行動不能状態だと対抗タイミングの防御魔法も使えないねん（笑）
アラン：チャンスは今だ（笑）命中判定、達成値は…２３。
ＧＭ：あのさ、こっちのクラスがわかっててその達成値出してるんか？（笑）
アラン：（苦笑して）ダメージ…プラーナ５点使用。これで終わりにしてぇ…３２点。
ＧＭ：ぐ、そのダメージはかなりキツイ。
ジュリア：移動して《退魔》を宣言。次の判定はクリティカルになります。

続く、次ラウンド。
流石に灯夜は行動不能にならなかったものの、アラン、ジュリアよりも行動カウントが低くなった。
しかも、アランは２回行動可能。
決着をつけるならば、今。

アラン：灯夜に攻撃。「あいつのためにも、倒す！」…達成値は２４。
ＧＭ：だから避けられないって（笑）
アラン：ダメージ２８点！
ＧＭ：ぐ、まだ倒れない…って、それでも行動カウントはお前が先かっ！！（笑）
アラン：続けざまに「まだ足りないかっ！！」…命中判定、…低い、達成値１６！
ＧＭ：あ…１点足りないっ！命中した。
アラン：ダメージ４３点！
ＧＭ：…そんなダメージを受けて生き残れる奴を見てみたい（笑）灯夜は行動不能、戦闘終了したいと思います。

退魔：聖職者の特殊能力。エミュレイターに対する判定をクリティカルにする能力。

■決着　Climax 04

「神は言った、その銃弾は確実に当たる、と」

　ジュリアの呟きに応えるように、２発の銃弾が吸い込まれるように灯夜の胸を貫いていく。

「終わった…のか？」

　普通ならば、それは致命傷どころか、確実に死をもたらすはずだった。だがしかし－

「ふふ…“賢者の石”の力を持ったこの私が…心臓を撃ち抜かれたくらいで死ぬとでも思っていたのですかっ！？」

　今の灯夜は、“賢者の石”の力によって生かされている。例え心臓を撃ち抜かれても、死ぬことは、ない。

ＧＭ：そう言いつつ、灯夜はまだ立っている。
アラン：「“賢者の石”か。それのせいで、何人の人間が涙したんだ…すまねぇが灯夜、そいつは壊させてもらうぜ」
灯夜（ＧＭ）：「させませんよ…これは、私が“あの一族”に復讐するためだけに作ったものなのですからね…」

「あなた達には…消えてもらいますよ」

　その言葉と共に、今までのそれよりも強力な魔力が、差し伸ばされた灯夜の腕に収束していく。
　もはや、対抗する手段は残されていない。
　だが、ジュリアはそれを冷静に見つめ…

「神は言った、それは紛い物の光であると」

　術式が完成し、その魔術が炸裂せんとしたその時、一条の魔力の閃光がそれを撃ち抜き、四散させる。

「阿呆…いつまで寝ているつもりだ、犬」

　彼らの後ろに、吹雪の姿があった。
　おそらくは、あの兵士達以上の強敵と戦ってきたのだろう。体中に無数の切り傷、そして右腕からは夥しい量の血が流れ出しており、魔術が使えたことが不思議な状態であった。

弘助：その言葉に反応し、獣が動き始める。人狼がゆらり、と起き上がる。そして、「ウオオオオオッ」と、咆哮し、“賢者の石”を砕かんと灯夜に飛び掛る！
灯夜（ＧＭ）：「無駄ですよ、そんな死に体では…この障壁すら破れない！」

　展開された魔力の障壁が、弘助を阻む。
　確かに、今の彼の力では…この障壁は破れない。

　－視界の隅に、灯夜に挑みかかる人狼の姿が映る。
　今までは、ただ自分の力に悲しむだけだった。
　でも、少しでもそれで誰かを救えるなら…
　この力を使う勇気を、一歩を踏み出す力を、私に…

ＧＭ：《小さな奇跡》の使用を宣言します。誰が使ったとは敢えて言わない。

　術式に解れが生じる。
　－ばかな、あり得ない。
　あんな死に体に、“賢者の石”の力が負ける？

　一歩、また一歩と。
　徐々に迫ってくる獣。

「この…くたばり損ないがぁっ！」

　その灯夜の叫びと共に、術式が完全に崩壊し、弘助の牙が灯夜の魔導書とそれを持った腕を噛み千切る。
　狼の牙が、“賢者の石”を砕いた。
　そして、“賢者の石”によって生かされていた灯夜…力がなくなった今、心臓を既に撃ち抜かれている彼は、真の死を迎えることになる。

ＧＭ：「ここで…なにもかも、が…終わりですか。虚しい、虚しいな…何も出来ずに終わりとは…せめて、この確執だけは晴らしておきたかった、ものを…」灯夜は倒れ伏し…そのまま動かぬモノと化す。
弘助：灯夜に踵を返し、足を引き摺りながら、ミストのほうへと向かい…そこで倒れる。

「見事であった、常盤弘助。それでこそ孤高なる狼の子、彼の眷属の末裔に相応しい」

　穏やかな表情で、吹雪が呟く。
　キセルを吸おうかと思ったが、ついさっき葉を切らしたことに気付き、キセルをしまい込む。

「まったく、気持ちよさそうに寝やがって…」
　呆れたように、弘助の顔を覗き込むアラン。

「…春日吹雪、先ほどの発言は取り消すべきです」
「…？」

　ジュリアの吹雪が、疑問を顔を浮かべる。

「彼は誇り高き眷属ではなく、誇り高き一人の“ウィザード”なんです」
「…なるほど、そうやもしれんな」

　－今はただ、一時の休息を…

小さな奇跡：大いなる者の特殊能力。ほんの些細な、しかし、運命を改変するほどの奇跡を引き起こす能力。

◆　結末　～エンディングシーン～　◆

■戦友　Ending 01

　バー“Ｗ”。
　寂れた場末のバー、客もろくに入らぬそのバーの席は、ほとんどが空席だった。
　たった一つ、カウンターの一番隅の席以外は。

アラン：「ロックで、２つ作ってくれ…」
ＧＭ：「２つか…」と言って、ジェイクがそこでアランのかけているサングラスに気付き「そういうことか」と言って、その後は何も聞かずにグラスに酒を注ぐ。
アラン：片方のグラスを持って、もう片方のグラスに…チンッと鳴らす。「…乾杯だ、“鴉”」
ＧＭ：ジェイクの計らいなのか、君のお気に入りの曲が店内に流れ出す。そう、“鴉”もいずれ聞くはずだった、曲だ。
アラン：「これで、よかったんだよな…きっと、あの娘は幸せになるさ。お前も見守っててやれ」と言って、グラスを煽り…「さーて、ジェイク…すまないな、こんなことをして」
ジェイク（ＧＭ）：「なぁに、お前と俺の仲だろう」
アラン：「あぁ、そうだな…俺はまた大英帝国に戻るとするよ」
ジェイク（ＧＭ）：「また、化け物退治か」
アラン：「あぁ」
ジェイク（ＧＭ）：「やれやれ、寂しくなっちまうな」
アラン：「あぁ、そうだな…だが、いずれまたジャパンに戻ってくるぜ」
ジェイク（ＧＭ）：「その時まで、ボトルはとっておいてやるよ」
アラン：「頼んだ…じゃあな」と言って、バーを出て行きます。

　アランがバーを出ると同時に、残されたグラスの氷が溶けかけ、カランッという音を店内に響かせた。

■縁　Ending 02

　その銀髪の少年は、今日もまた、ビルの屋上から街を見下ろしていた。
　だが、またもや予期せぬ客が現れたのだ。

ジュリア：またキィッと音を立ててドアが開き、コツコツコツ…と、あの時の焼き直しのように歩み寄っていきます。
ＧＭ：視線をあなたに向け、「なんだ、またお前か」と言ってキセルを吸っている。
ジュリア：「あなたこそ、この場所が気に入ってるのですか？」
吹雪（ＧＭ）：「あぁ、そうだ。この緋山に住む人間の営みを見る、というのも悪くは無い」
ジュリア：「なるほど」同じように街を見下ろし「ここからなら、確かに世界が見渡せるでしょう」
ＧＭ：「私もそんな気がする」と言った後、クスクスと笑う。
ジュリア：「何か、あったのですか？」
吹雪（ＧＭ）：「敵に塩を送るなど、われながら愚かしいことをしたのだと思うと…つい、な」
ジュリア：ため息をつき、腕を組んで「神よ、彼の者の行いを事前に聞けなかったことは、私の信仰心の甘さ故、でしょうか？」
吹雪（ＧＭ）：「随分と大げさだな。そこまでの大事はしたつもりはないのだが」
ジュリア：「えぇ、ですが…あなたが、そのようなことをしたのは、私にとっても予想外でした」
吹雪（ＧＭ）：「…おそらくは、神にも見えぬものがあるのだろうよ」
ジュリア：「そのようですね、残念です…」
吹雪（ＧＭ）：「まぁ、暫くはこのような戯れに興じているのも悪くは無いかも知れんな」
ジュリア：吹雪のほうを向き、「あなたに神の…いえ、ラヴノスの加護がありますように」

　キセルから、紫煙が空へと立ち昇る。
　この付き合いは、しばらくの間続きそうだと、２人はほぼ同時に思った。

■穏やかな時間　Ending 03

　あれから、ミストは春日家で保護されることになった。割とよくしてくれるらしく、殆ど不自由の無い生活を彼女は送っているらしい。
　彼女の力は、殆ど失われているらしい。ウィザードとしての適正はあるらしいが…その道を歩むかどうかは彼女次第だ。
　自分はというと、あれから吹雪との親交が若干深まった…ような気がする。仲がいいか悪いか、とい言われれば、結構微妙な関係だったりもするが。
　あいつは言うならば、猫だ。少しは近づきはすれ、絶対に自分とは完璧に相性が合わない。

　一息を切らしながら、ミストが待ち合わせ場所に走りこんでくる。

ミスト（ＧＭ）：「お待たせ…しました」
弘助：「あぁ、いや、そんなに待ってない」
ＧＭ：「そういえば、吹雪さんがこれを…」と言って、彼女は茶封筒を取り出す。封がされている。
弘助：「吹雪が？」

ミスト（ＧＭ）：「待ち合わせ場所に着くまで開けるなって、散々言われたんですが…」
弘助：「見てみようか…」封筒をピリッと開ける。
ＧＭ：封筒の中には、２枚の映画チケットが。
弘助：「これ、は…？」
ＧＭ：よく見ると、上映期間終了間際の映画のチケットですね。旬はとうの昔に過ぎている。…しかもホラーものだったりするが（笑）
ジュリア：ホントに“塩”か、それっ！？（笑）
ＧＭ：まぁ、彼なりに悩んだ末にこれだったんだろう…と信じたい（笑）
弘助：「なるほど、それで…か。せっかくだから、見に行ってみようか？」
ミスト（ＧＭ）：「あぁ、吹雪さんで思い出したんですが…」
弘助：「うん？」
ミスト（ＧＭ）：「…私のものにならないかって、どういう意味なんでしょうか？」
弘助：ぶっ！？（笑）「な、な…なぁああっ！？そ、それは！？」
ミスト（ＧＭ）：「私も意味を問いただしてはみたんですが…聞いた途端、吹雪さん大笑いして“あぁ、気にするな”の一点張りで…」
弘助：「あんのやろぉ～…」
ＧＭ：彼としては遠まわしに君をからかっているつもりなんだろうが、君としては結構腹立たしいだろうな（笑）「ど、どうしたんですか？」とミストが。
弘助：「あ？あぁ…」
ミスト（ＧＭ）：「もしかして、気に障るようなこと言ってしまいましたか？」
弘助：「そ、そんなことじゃない！むしろ、むかつくのは吹雪の奴だ！」

　脳裏に、してやったとばかりにコロコロと笑う吹雪の顔が浮かんだ。
　やっぱり、あいつは猫だ。相性は最悪なことを、再確認した。
　だったら、こっちだって反撃くらいはしてやる。

「よし、映画見に行こう、今すぐ！」

　弘助の手が、ミストの手を掴み、弘助は戸惑い気味なミストと共に、駆け出していく。

　やがて、２人が雑踏の中に消えていく。
　－今はまだ、穏やかな時間を。一時の休息を。

ナイトウィザード　～狼と少女～
－完－

チケットの映画：多分、彼なりに悩んではいたのだろう。詳しくもなさそうだし。
それにしたって、ホラー物は無いぞ吹雪さん。
吹雪の行動：当然、弘助をからかって楽しんでる。猫と言うよりは狐か？
ともあれ、あの頃からは信じられないような仲になったものだ。

■ SPECIAL THANKS！

・プレイヤー
常盤弘助／Ｙ口君
アラン・クルーガー／Ｈ田君
ジュリア・クラーク／Ｍ田君

・制作協力
イラスト／Ｈ田君
リプレイ班班長／Ｏ山君
生産／Ｍ田君

　最後に…
　ＴＲＰＧ研究会の方々と、このリプレイを読んでくれた方々に、感謝を。

－ＨＩＺＩＲＩ

それは、ささいな運命の悪戯。
されど、それは必然。

穏やかな時間はしかし、ゆっくりと崩壊を始める。

その力は人を不幸にするという。
その力は誰かを守るためにあるという。

少女か悲しみ、狼はただ吼える。

狼と少女が出会うとき、運命の扉は開かれん。

ナイトウィザード
～狼と少女～

孤高なる狼の子よ、紅き月の夜に吼えよ。